

第2章 野宿生活者の就労ニーズと求人（雇用）側の対応意識

2-1.野宿生活者の就労ニーズ

(1) 就労ニーズ調査の実施概要

今回の調査においては、野宿生活者の具体的な就労ニーズを把握するため、大阪府内（大阪市内含）で50人を抽出し、大阪市立大学文学部社会学研究室的協力により、聞き取り調査を行った。

聞き取り調査の期間、場所下表のとおり（表2-1、2-2）で、平成13年2月中旬から3月中旬にかけて15日間（表1.1参照）で行った。

調査日	市・シェルター	票数
2月15日	大阪市	1
2月17日	大阪市	1
2月18日	大阪市	3
2月19日	大阪市	2
2月20日	堺市	3
2月22日	大阪市	2
2月24日	大阪市	4
2月27日	大阪市	9
3月3日	大阪市	6
3月6日	堺市	2
3月11日	シェルター	5
3月14日	豊中市	3
3月15日	シェルター	3
3月16日	シェルター	2
3月19日	八尾市	4

表2-1. 調査日程

市・シェルター	調査場所
大阪市	扇町公園
	JR大阪駅周辺
	大阪城公園
	道具屋筋
	日本橋
	天王寺地下
	長居公園
	浅香中央公園
	堺市
大仙公園	
豊中市	服部緑地
八尾市	久宝寺緑地
シェルター	あいりん夜間臨時緊急避難所
	長居仮設一時避難所

表2-2. 調査場所

なお、今回の調査は質的側面にウエイトをおいた調査であり、数値データを用い、図表を作成している部分もあるが、限られたサンプル数での限界があり、必ずしも野宿生活者全体の傾向を示すものではない。

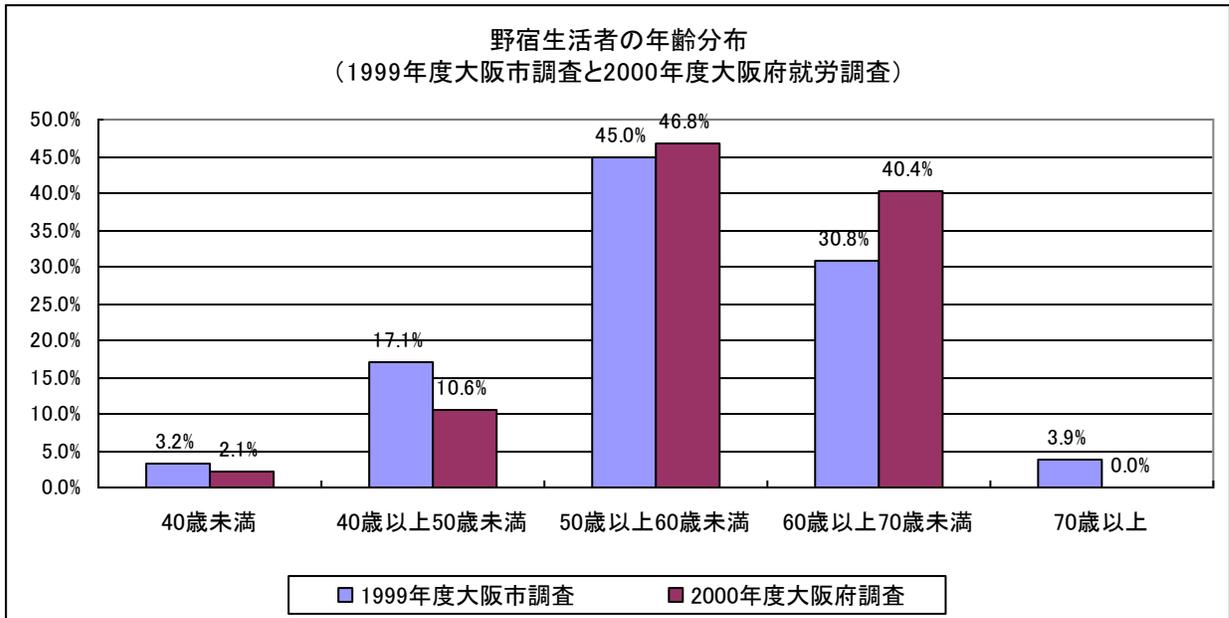
(2) 調査対象の属性と特徴

①年齢・性別等

今回聞き取りに協力してくれた人々は、35歳から69歳まで（平均年齢56.5歳）で、50歳代から60歳代の占める割合が高くなっている。1999年度大阪市が実施した野宿生活者（ホームレス）聞き取り調査から得られた結果と比較して、40歳以上50歳未満の年齢層が少なく、60歳以上70歳未満の年齢層が多い。

また、性別については、今回の聞き取り調査では全員が男性であった。

図 2-1. 野宿生活者の年齢分布（1999 年度大阪市調査と 2000 年度大阪府就労調査）



(出身地)

出身地については、地方別で見ると近畿地方（32.0%）、九州地方（28.0%）の割合が高く、都道府県レベルで見ると大阪府（28.0%）が飛び抜けて高くなっている。近畿以西（西日本）の割合が高くなっている。

(住民票)

住民票の所在地について見てみると、不明・無回答も含めた調査協力者 50 人のちょうど半数が大阪府内となっており、府内 25 人中 17 人が大阪市と回答している。

(直前居住地)

野宿を始める直前に大阪府内で生活していた人はさらに多く、大阪府内と回答したものの 35 人のうち、大阪市と回答したものが 30 人いた。

直前居住地が大阪府でない場所を回答している 5 人について、「どのような理由で大阪にきたのか」をみると、4 人は大阪に仕事を探しに来ており、1 人は大阪以外の場所で野宿をしていて大阪に流れついたという事例であった。

(野宿形態)

居住形態をみると、今回話を聞かせてもらった半数以上がテントで生活していることがわかる。

テントを張っている事例としては、下記のようなものが挙げられる。

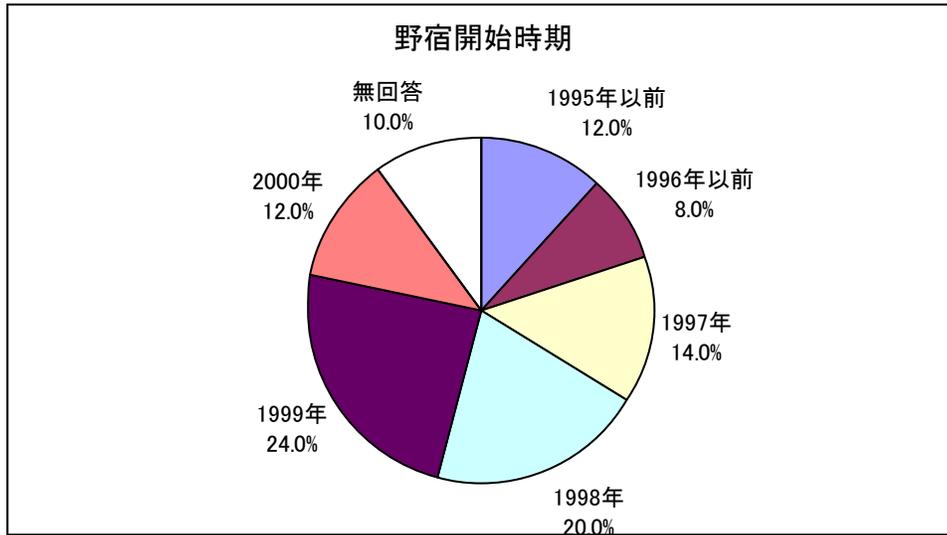
- 会社が倒産、失業し、半年ほど仕事を探したりしながらアパートに住んでいたが、高齢のため仕事が見つからず、貯金があるうちにアパートを出て公園にテントを張った。(Case 20)
- 1ヶ月半ほど地下街で寝起きした後、周りの野宿者から聞いてテントを張って野宿を始め、同時にアルミ缶回収、自炊も始める。(Case 21)
- テントを張っても厳しい生活であることは変わらず、「気楽と言う人は多いけどやっぱり、精神的に疲れるね」とも言う。(Case 19)

テントを張らない（張れない）理由としては、「撤去」、「定着したくない」など様々である。また、テントを張らない事例では、寝るとき（夜）、起きているとき（昼）で移動しなければならず、明日もそこで寝させてもらうためには気を使うという。

（野宿開始時期）

野宿開始時期について見てみると、ここ 2,3 年以内に野宿を余儀なくされるような状況に陥った事例が半数以上だった。特に、1999 年、1998 年になって野宿をはじめたと答えている人が多い。

図 2-2. 野宿開始時期



②職歴

（全体の傾向）

調査対象となった野宿生活者について、産業・従業上の地位・就業期間を見るとこととする。聞き取りに協力してくれた野宿生活者 50 人の、「初職（学校を卒業して最初に就いた仕事）」、「最長職（主に従事していた仕事）」、「直前職（野宿生活をはじめ直前に就いていた仕事）」についてみると、初職では製造業やその他の産業（卸売・小売り業、飲食店、サービス業、農業、鉱業）の占める割合が高く、最長職、直前職では建設業の占める割合が高くなっている。

従業上の地位について見てみると、初職では「常雇い」の割合が高くなっているが、最長職、直前職では「臨時・日雇」の割合が高くなっている。

最長職の就業期間については、「10 年未満」の割合は約 1 割程度で、20 年程度と答えている割合が高かった。最低で 1 年、最高で 38 年、平均して 19 年程度、「同じ種類」の仕事に就いてきたという結果が得られた。

また、「釜ヶ崎での就労経験」では、約 6 割の人が、釜ヶ崎で働いたことがあると答えている。

今回の聞き取り調査では、大阪市内で野宿している人の約 71%が、また、大阪市内で野宿している人の約 36%が、釜ヶ崎で働いたことがあると答えた。釜ヶ崎での就労経験は、明らかに大阪市内の割合が高くなっていることがわかる。地理的に考えると当然の結果だろう。

だが、大阪市内で釜ヶ崎で働いた経験がないと答えた人の大半も、最終職では、臨時もしくは日雇で建設業に従事していたという結果が得られている。つまりは、釜ヶ崎を経由したかどうかという違いはあるものの、建設業の不安定な就労形態にあった人たちだったのではないだろうか。

もちろん、今回の調査は聞き取った人数が 50 人であること、サンプリングを行っていないことから、今回の調査結果が大阪府内の野宿生活者の傾向ということとはできない。

次に聞き取りを行った調査対象者の職歴の典型例と思われるところを紹介する。

(職歴の典型事例)

■建設業

1957 年大阪で生まれる。

高校をでて、仮枠大工をしていた親父の紹介で町屋の左官の見習いをするようになった。保険はかけてくれていたかもしれないがわからない。上下関係がきびしく「こて」を持つのに一年以上かかる。が、一年になるかならないかぐらいでやめた。

小さかったとき犬好きだった彼を石川で乳牛の牧場をやっていたおばさんが「動物好きやったからこっちに来いさい」と誘い、彼はそこで 1,2 年働いた。牧場の朝は早く、乳を搾るのはやはり体力がいる。力仕事だ。いろいろな事情で牧場の仕事を辞める。

そして、二十歳のときに釜ヶ崎へやってきた。現在、43 歳なので、日雇をはじめて 23 年。仕事は主に型枠、解体業、あと土木（などであった）。

今年 2001 年になってえべっさん（十日戎）以降仕事がでている。えべっさんまでは仕事がなかった。仕事でたとっても賃金はだいたい 1 万 1500 円。9000 円のところもあった。このあいだは 1 日 1 万円で飯代 3800 円、そのほか 3000 円とられて、一日 3200 円しか残らないところがあった。

この日も姫路の高速道路の橋桁工事に行ったものの残業が多く、朝出に残業をしても時間外がつかないので出てきたところだった。

最近は本当にひどい場所が増え、二級の印紙を貼るところもある。

仕事には平成 9 年（1997）から就けなくなった。きついときは拾い食いもした。日雇労働者は「スクラップみたいなもんやからな、必要なときだけ呼ばれる」などといっていた。（Case 34）

1960 年（18 歳）で大阪の高校を卒業し、高速道路の防音壁を張る仕事を 1969,70 年（27,8 歳）まで約 10 年間した。この仕事は、保険とか年金などは一切なかった。この仕事を辞めた理由として「そう。あのころは若かったし、給料もよかったからな。金につられて、基礎工事関係の仕事に移った」と語る。基礎工事関係の仕事は、一ヶ所の会社につとめるというものではなく、数人でグループ組んで仕事が入ればその現場の飯場について、というような請負仕事をしていた。その仕事の半分以上が公共工事であった。「橋も架けにいったし、山留めにもいったし、地下 55 メートルまで手掘りで穴掘ったり、土砂崩れした山の斜面を土留めしたりな。想像もつかんやろ。えらい仕事やぞ。危険な仕事した。」賃金は最低でも 1 日 3 万円はもらえた。しかし景気が悪くなるにつれ、仕事が減少し、とうとう 2 年半前（1998 年夏）に、それまで住んでいたアパートを家賃払えないという理由で出た。その後西成に行ったが、仕事が全くなくて、1 年半前（1999 年）くらいからここで野宿している。（Case 24）

昭和 14 年生まれ、61 歳。瀬戸内海の島で生まれる。身内（両親）はいない。

小さきときに施設に預けられて、そこから養子にいったけど、その母親も早くに亡くなった。それから結婚もしてへんし、天涯孤独や。

中学校卒業してから集団就職でこっちに来てからはずっと大阪かな。

建設関係の仕事で、大阪の 4,5 ヶ所の工務店で働いていた。一番長いところで、20 年くらいかな。住んでた所は、賄いはなかったけど、会社の寮だったよ。朝はどっか喫茶店でモーニング食べて、弁当どっかで買って行って、夜御飯食べて、お酒のんで。

「はつり」の仕事をしていた。仕事が一番調子よかった時は、1 万 7 千円から 2 万円くらいはあったんじゃないかな。それでも、食事してお酒のんだらあんまりあまらなかったな。結構力のい

る仕事で。2年半前に病気（心筋梗塞）で倒れるまでは体力には自身があったんやけどな。

最後は大阪市内の工務店で10年間くらい勤めていた。その工務店のおやっさんは、自分に身よりがいないということもわかって、雇ってくれとったんや。だから、病院に半年入ったときも良くしてくれた。けど会社が倒産してしまったら仕方ないわな。

病院から退院してきて、釜ヶ崎にはじめて仕事を探しにきたんや。でも来てびっくりした。人は多いし、仕事はないし。で、釜ヶ崎で野宿を始めた。

現在、社会医療センターで薬（ニトロ）をもらいながら、1週間だけNPOからのガードマンの仕事があたったので、仕事をしている。（Case 37）

■製造業から建設業へ

1936年、大阪府に生まれる。母親が40歳のときに生まれた。「生まれたんもこの（野宿している場所の）近所。学校も近所の学校やし、まあずっとこの近所やね。ずっと大阪。でも小学校1年か2年の時、母親と一緒に、富山に疎開したんよ。富山に母親の実家があったから。勉強なんて全然せんよ、そんなん。イモ掘ったりそんなんばかりしとったから」。敗戦後、疎開先から戻ってきて中学校に通う。「中学校も勉強なんかほんま、それどころじゃないって時代やったからね。親についてサツマイモやら食べモン集めに汽車乗っていったり、そんな時代やったからね。高校なんか行こうなんていう状態じゃなかったからね。周りの友達もそんな感じやったんちゃうかなあ。高校なんか行かんでも普通っていう時代やったからね。今とは違うよ。親も学校より手に職つけてって感じやったからね」。

1951年（15歳）、中学校を卒業後、すぐに親の薦めで近くの鉄工所で旋盤工として働き始める。10人程度の規模の鉄工所だった。電線の束を束ねる金具や消火栓の口の金具を作っていた。

「鉄工所で働きだしたんよ、中学出てすぐ。そこがまた、親方がほんますぐ殴るような人であ。ほんますぐ殴られた。もう無茶苦茶なことさせられたわ。ほんま恐ろしい親方であ。今とはちゃうで。技術も教えてなんかくれへんからなあ。殴られて覚えろって感じで。親呼び出されて怒られたこともあったわ。ほんま今とはちゃうねんて。給料はもらとったけどな、一応月払いで。全部、親に渡すんよ、親方が。...保険とか？そんなんないって。そらその時でも大学出て大会社で働いとったような人らはそんなんあったやろうけど、ワシらそんなんないって。親方が何人か雇って、そやなあ10人くらいかなあ、そんな小こい工場やからなあ。もう一切なし」。1年するかしないかでA氏はこの鉄工所を辞める。「なんで辞めたって、辞めさせられたんよ、親に。親がもっと給料ええ会社あるからそっちに移れてなって。そんな感じやったよ」。

次に就いたのは「A便箋」という会社で工具をしていた。

その後も幾つかの仕事を経々とする。保険などのある仕事場ではなかった。

1966年（30歳）頃、建設業で働き始める。主にトビの仕事に就いていた。ある一人の親方の所で日払いの仕事に就いてきた。ここでも保険などは一切なかった。「そやなあええ時は一日2万くらい稼いどったかなあ。そらサラリーマンなんかよりずっと給料良かったで。年金なんか払ってなかった。何でってな、稼ぎ良かったもん。年金なんかかけんでも大したことないわーって感じやったからなあ」。

30年以上建設業の日雇を続けてきたが、釜ヶ崎から仕事に行ったことはない。

歳を取ってくると大手の会社で働く時には歳をごまかすようになる。「大手はなあ、歳ではねるのよ。歳取ったモンを雇とってケガされたら、そんな歳いってるモンにトビみたいな危ない仕事さす方も悪いということになるからなあ。危ないいうて使うてくれへんよ。大手は最初に歳なんぼでとかなあ、健康診断とかで全部取られるからなあ。大手の時は歳ごまかしとったよ。小さいなあ、親方が一人でやとるような所やったらそんなんは何にもないねんけどな」。

1994年（58歳）頃から、親方について仕事をするようになる。大きな倉庫の屋根や壁を取り付ける板金の仕事である。「親方のところから仕事行ってたんよ。一緒に働いてたんはなあ、そやなあ9人かそこらやな。出張もよう行つたで。民宿泊まってなあ、和歌山の。給料は日払いや。5年く

らい働いとったかなあ」。

しかし、1997年（61歳）頃から徐々に景気が悪くなっていく。「そうやなあそれくらいから景気悪くなって行って、仕事減っていったなあ。そら景気悪なったら倉庫なんか建てへんやん。仕事ないから人数も減らして行ってなあ。ほんだら今度は人数減ったら大きい仕事は取れへんやん。そんなんでも悪い方悪い方いてもたんよなあ。ほんでまあ、大阪市内にアパート借りとってんけど家賃払われへんようになってまあ結局野宿するようになったわけよ」。仕事が減り、1999年7月（63歳）野宿するに至る。（Case 47）

1938年群馬県に生まれる。中学校を卒業後、地元の鉄工所で働きはじめた。当時そういった工場（その工場は150人ほどの規模であった）では新卒は50人ほどの募集を行っていたが、実際は5～10人しか集まらなかった。それは、賃金が日当70円と安かったためではないかと理由を言う。自身も2年で辞めてしまった。その後就職した同じ群馬の製造業関係の大手の企業では、日当350円の収入であり10年以上続けたが、個人的に失敗をしたことで退社した。退職金や保険といったものは一切なかった。

1966年（28歳）から、季節工として車の生産会社、家電製品製造メーカーなどでそれぞれ半年から1年位、合計で5年ほど働いていたが、万博のあった1970年頃からは完全に日雇いとして釜ヶ崎から仕事に行き出した。20年以上同じ釜ヶ崎のアパートで暮らしていたが、次第に飯場やドヤでの生活に移行してゆく。そして、1998年（60年）夏より、仕事がなくなったため「暇なって」来たこの場所でテントを張って野宿生活をはじめた。（Case 12）

■製造業

1950年大阪市に生まれる。大阪で育ち、1968年（18歳）に大阪の高校を卒業する。高校卒業後、1年くらいの間は東京でブラブラして暮らしていた。

1969年（19歳）、大阪に戻り印刷会社に印刷工として就職（常雇）する。印刷工として腕を磨く。その会社で職人としての腕を認められ見込まれて、社長に独立を勧められる。独立資金も社長が用意してくれたので就職から6年後の1975年、25歳で独立する。大阪府で印刷会社を経営するようになる。化粧品の瓶などにプラスチックで印刷する会社で、独立当時はそのような印刷をできる会社が他にはなく、非常に儲かっていた。会社独立とほぼ同時に付き合っていた女性と結婚する。80年代までは会社の景気も良く、工場は8人の従業員を雇い、順調であった。

独立当初は、印刷の品質について取引先もうるさくなかったが、徐々に品質について厳しくなるようになり、品質が悪ければ返品されるようになる。返品の場合、印刷代がもらえないだけでなく、印刷した瓶も買い取らなければならないので、赤字が出てくるようになる。80年代終わりから90年代になると経営もやや厳しくなってきたようだ。しかし、印刷関係の世界では『印刷のA』と言えば超有名やった」というぐらい（自分としては）腕には自信があった。

厳しいながらも経営を続けていた1994年、台風で工場内が水浸しになる。工場内には、ドイツ製化粧品の瓶に印刷をし終えたものが山積みにしてあった。台風で進入してきた水はその印刷をボロボロにしてしまった。瓶代の代金も請求されることになり、取引先に1000万円の借金を背負うことになる。

1000万円の借金が直接の契機となり19年連れ添った妻と離婚する。妻は息子を連れ、妻の実家のある愛媛に出ていく。1994年、19年続けた工場が倒産する。工場兼住居も引き払い、残す現金は50万円のみになっていた。8人の従業員に払う退職金ももはやない。「退職金は払えん。その代わりにみんなで旅行に行こう」。退職金代わりにその50万円で従業員を秋吉台への旅行に連れていき、完全にスッカスカになる。

金融屋からの借金ではなかったのが、取り立てに追われることはなかったが、大阪にはいられなくなり、倒産後すぐに和歌山に行き、印刷関係の仕事のツテでB印刷会社に印刷工として就職する。漆器に模様をスクリーン印刷する会社である。印刷用の塗料の調色のできたので、その社

長には重宝がられた。和歌山ではアパートを借り生活していた。仕事場での人間関係が理由で、社長には引き留められたが、約1年間勤めた工場を退社する。1996年の冬のことである。

和歌山の工場を退職すると大阪に戻ってくる。帰ってきてすぐ、お酒を大量に飲んで酔っばらって道で寝てしまっている内に、財布から何までを取られてしまう。持ち金がスッカラカンになってしまい野宿が余儀なくなる。大阪に戻ってきてすぐに、現在とは別の場所でテントも建てずに初野宿をする。真冬のことであったので、寒さに「ふるえもってねてた」。途方に暮れ、現在の場所に行ってみると、長老のような男性に声を掛けられ、その男性がご飯をおごってくれた。「うれしくて、涙出た」そうだ。テントに泊めてもらった次の日の朝、その男性に、「今日から米と酒を調達してこい」と言われ、あわててその場を後にする。その後、長年生活していた大阪府下のこの場所で野宿するようになる。(Case 48)

■運輸・通信業

鹿児島出身。64歳。

高校を出た後、タクシー会社に勤めていた。タクシーの運転手を約30年。計6カ所。大阪市内のタクシー会社だった。タクシーもトラックの会社も保険、年金をかけてくれていた。タクシーもトラックもすべて歩合制だった。一日一万円稼いでいた。最初についたAタクシー(会社)には600台ぐらいあった。このタクシー会社は厳しい。車のにおいのチェックなどをする。しかしこのタクシー会社で働いていた経験があればどのタクシー会社でも雇ってくれるほど。

野宿をする前はトラックの運転手。トラックは10トントラックに乗っていた。トラックは24時間走りどおしで仕事きつい。トラックの会社には60-70台あった。トラックの運転手を約20年、2、3カ所。

定年前に配偶者が亡くなり仕事を辞める。退職金に800万円もらったが、2、3ヶ月で使い切ってしまう。その後アパートをひきはらい、野宿する。現在野宿して3年になる。

子どもが娘2人に一番下に男の子がいるがどれも結婚し、頼ることができない。妹夫婦が大阪にいたので彼らを頼って大阪に出てきた。

現在でも免許の更新はいつている。(Case 25)

■最後についた仕事がサービス業

年齢は1943年生まれの57歳。東京生まれの東京育ち。

高校を卒業してから、メラニン樹脂製の板を作っていた。結構大きな工場のようにプラスチック関係のもの、バケツなどを他の課ではつくっていた。ここでは常雇いで3年間働いた。各保険もあったようだが、退職後失業保険をもらうことはしなかった。失業保険などに頼りたくはないようだ。

そしてこの会社を辞めた後すぐにヘルニアになる。病院をいくつもいったが治らないと言われ、手術することになる。手術をしたが、そのヘルニアの後遺症でいまでも腰を曲げる仕事をすると足がはれてしまう。

ヘルニアの手術後激しい仕事はできないので、セールスの仕事を始める。そこで知り合った同僚と24歳のときに大阪へ行こうということになり、二人で大阪へやってきたが、一人はやっぱり東京のほうが良いということで帰った。

そして彼は何か手に職をつけるためにパン屋で勤める。当時はパン屋がはやっていたがバブル崩壊ぐらいのときにパン屋がはやらなくなってきてやめざるえなくなってパン屋をやめる。

その後仕事がないので、ホテルの清掃を主にしていく。梅田などいろいろなホテルを転々としたが、6ヶ月ほど働くとヘルニアの後遺症でくるぶしあたりがはれてくるので1ヶ月ほどやすまないといけなくなる。迷惑をかけるわけにいかないと彼はそのたびに仕事をやめる。最後の勤め先ではなおつたらまたお願いと言われていたのに治って、行くともういらないとされた。30件ぐらいまわったがどこも採用してくれず、15、6万もって野宿することにした。それでも一日千円ほ

ど最初はかけていたのですぐにお金はつきた。おととしの夏のことだった。

ホテルの清掃の仕事もいまでは年齢制限が厳しくなっているという。むかしはむしろ年寄りの仕事であったようで、清掃の仕事をやり始めたころ面接に行くと若いのにと言われたこともあるという。いまでは50歳未満でないと雇ってくれないという。ある時面接にいくと一人の募集に50人面接にきたという。若い人のあいだではまだまだ仕事があるようだが、年寄りのところにはないことをしきりに言っていた。(Case 3)

1951年生まれの49歳、出身は大阪府。

高校を卒業して大阪堺市にある大手の工業関係の会社に就職する。

ここは自転車の部品を作っている会社で競輪の自転車も作っていた。競輪用の自転車は選手用に設計され注文通りにつくらなくてはならないので技術がいる。工場で自転車のギヤなどを作っていた。NC旋盤やプレスやロボットを使っていた。板から切り出すときに先がダイヤモンドのものできりだすが、それは最小のもので5mmなのでそれより細かくきりだしたいときはその先を水が噴射されるものに付け替える。水のものだとなによりも柔軟に扱える。特に熱が少ないので変形が少ない。また自分で図面も書いていた。

33歳のときに自分の腕が認められて、埼玉県にある大手の製造関係の会社に出向でいくことになった。このとき係長。ここで5年ほど働いたが喧嘩をしてタンカをきって会社を辞める。辞めた理由は「気が短くてな」。

この会社を辞めた後、東京へ行き、さまざまな仕事を転々とする。その後、京都へ行き、太秦の映画村で小道具を作る仕事につくが、おもしろくなく、数ヶ月でやめてそこでできた知り合いに紹介されて京都の旅館に勤めることになる。旅館(客商売)なので身元保証人は二人必要だった。そこではしばらくしてフロントをまかせられた。フロントの仕事は、早朝までで、朝しか休むことはできなかった。そこで4年間勤めたあと、大阪へでてきた。

大阪ではパチンコ屋に勤めたが、フロアではなくて、事務をまかされていた。パチンコ屋の事務はきびしく玉の数と勘定が合わなければならない。朝の入れた玉をつける事務と終わりの確認をする事務がいて自分は後者の方だった。このパチンコ屋では住み込みで働いていた。一階がパチンコ屋で上がアパートになっており、その上何階かが従業員用のフロアになっており、そこで住んでいた。半年でパチンコ屋をやめて野宿をすることになる。現在、野宿して2年半になる。

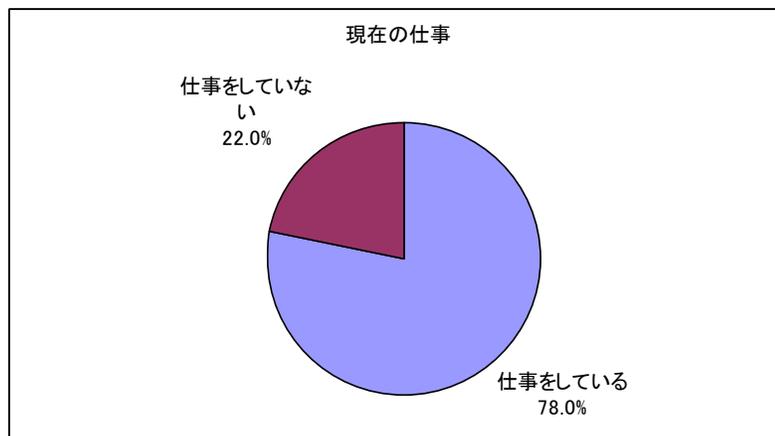
(Case 46)

(3) 生活実態

①現在の仕事の有無

現在、何らかの「仕事」をしているかどうかきいたところ、39人（約8割）から「仕事」をしているという回答を得た。1999年大阪市が行った聞き取り調査の結果（約8割の野宿生活者が何らかの「仕事」に従事している）と同様の結果が得られた。

図 2-3. 現在の仕事

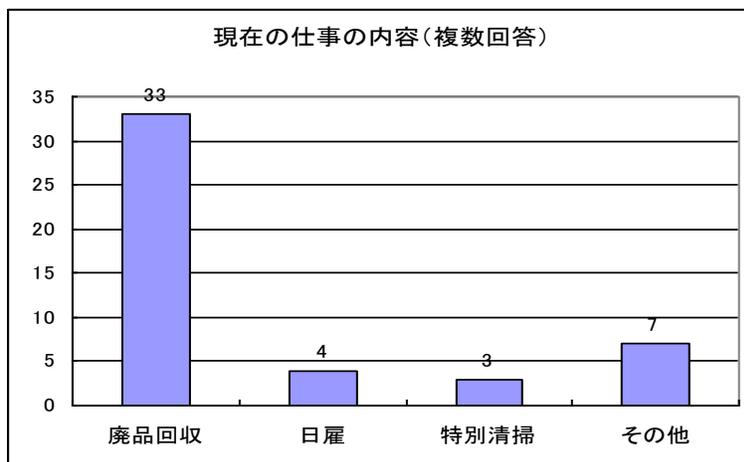


②仕事内容と収入

現在仕事をしている人の8割以上（33人）の人が「廃品回収」を行っていると答え、そのうち9割以上（31人）がアルミ缶を、約3割（11人）が粗大ゴミを回収していた。また、廃品回収をしている人の約8割以上（就業日数を回答した22人中18人）が「毎日働いている」と答えた。そして廃品回収をしている人の収入を見てみると、1ヶ月あたり5000円から80,000円で、平均して29,700円と3万円に満たなかった。

「特別清掃」と答えた人の就労日数を見てみると2日もしくは3日、一回当たり5700円（実質5400円）の収入なので、1万円から1万5千円の収入になっている。

図 2-4. 現在の仕事内容



（現在の仕事～具体的に～）

それでは野宿生活者が、現在どのような仕事に従事しているか、その様子について聞き取りによる具体的な内容を紹介する。

■廃品回収

●空き缶だけを回収

1996年（56歳）からは、高速道路の高架下の下にダンボール囲いを作り、そこで野宿するようになる。その頃から野良ネコを飼っている。子どもが生まれたりして、世代交代しながらもトータルでは12匹になっている。その頃からアルミ缶回収をしている。1日1600円程度は稼いでいた。そこで3年半生活していたある日、アルミ缶回収から帰ってくると囲いダンボールに「追い出しの張り紙」が貼られていた。3年半生活していた場所を「仕方がない」と「自分で出た」。それからは台車に寝床用のダンボールと毛布などの生活用品を積んで、日中はアルミ缶回収、商店のシャッターが降りる頃、ダンボールで囲いを作り眠るという生活をするようになる。

高架下を追い出されてからも、飼っていたネコにエサをやるために高架下には通っている。1週間で大きな袋入りのキャットフード3袋食べる。全てアルミ缶回収で得た収入でまかなっているが1日400～500円はエサ代にかかる。テントを建てようと思わないのも、「扶養家族（ねこ）おって、他には行かれへんからなあ」。

今年の冬、「凍傷みたいになって、手が曲がらんように」なった。はめていた黒い手袋をぬいで見せてくれる。手は黒く曇った色になっており。指の関節は肉がえぐれてへこんでいた。曲げようとしてもほとんど曲がらない。手が自由に動かなくなり、アルミ缶の回収も思うようにできなくなった。それまでは1日1600円程度は稼いでいたが、手が動かなくなってからは1日800円程度しか稼げなくなった。（Case 6）

●空き缶と粗大ゴミを回収

現在仕事は廃品回収を毎日朝の5～8時と夕方の5～8時にやっている。区役所からもらってきた粗大ゴミの収集日表と拾った地図を元に、主に松原市へ自転車で行く。アルミ缶の他に電化製品などを拾う。アルミ缶は日本橋では1キロ80円で野宿している近所では55円だそうだ。運が良ければアンブやコンポを拾えて、近所の寄せ屋に持っていけば5000円や9000円で引き取ってもらえるそうだ。しかし平均的には1日1000円程度で、月2～3万程だ。（Case 1）

空き缶と電化製品を拾うのが主な収入である。電化製品には5000円で売れるものもあり、大体1日1000円の収入は確保できている。使っているリアカーは色々なものの部品を組み合わせて作った自作品である。空き缶を20～30載せられるものと、100は載る粗大ゴミ用のものと2台所有している。本当はもっと大きくしたいが、邪魔になって注意されたとき耳が悪いため気付かないことが多い。それはとても迷惑なのでこの大きさを抑えているのである。東大阪の方へ集めに行き、マンションを20件くらい回るのでかなり時間がかかる。寄せ屋も値段の高い日本橋までわざわざ持って行く。昼は恥ずかしいので、でかけるのは深夜から朝方である。（Case 18）

野宿生活になってから3年になる。日々、アルミ缶や電化製品を集めて、それらを売ってわずかながらも稼ぎを得ている。アルミ缶は寄せ屋にもっていくが、電化製品は野宿しているこの公園に中国人が買い付けにくる。「そのまえの通りに車でのりつけて、壊れていてもいいから電化製品を買っていく」。それを中国で売っているとのことだが、なかの機械を再利用しているわけではなく、外のプラスチックをそのまま再利用するようで外見がきれいなから買っていく。なかの部品は中国のほうが安く作られているため必要なのは外見だけだそうだ。特にコンポなどは高く買ってくれるらしい。値段はいいもので3000円ぐらい。それらを集めに行くのはやはり夜で、「そのあたり周りの人（住民や行政？）はわかってくれへん」。（Case 23）

●新聞や雑誌を回収

野宿を初めてからしばらくの間は何も仕事はしていなかった。しばらくして、A 氏の近くに野宿している人からスポーツ新聞や雑誌を集めればお金を稼げることを教えてもらう。野宿を初めてから A 氏はスポーツ新聞や雑誌を回収して釜ヶ崎で販売することを仕事としている。

「毎日なあ朝の 3 時に起きて仕事の準備や何やして、新聞な、スポーツ新聞や雑誌や集めて電車乗って西成持っていくねん。この辺は結構集まるからなあ。新聞もスポーツ新聞やないとあかんねん。西成行ったら競馬でもボートでも競輪でも何でもやってるやろ。ノミ屋よノミ屋。せやから西成もってたらすぐ売れるねん。まあ 1 日千円くらいかなあ、大体ね。まあ何とかメシには困らんくらいは稼いでるよ」。(Case 29)

■日雇

まだ若いので仕事を探しやすい。最近もちよこちょこセンターから仕事に出ているらしい。探しやすいといっても、3 日に 1 回ほどであるようだ。しかし、「今どのくらい稼がれているのですか」という質問に、「ほとんどないよ」「でも仕事行かれてるんですね」「まあ 3 日に 1 回くらい」というので、それなりに稼いでいるのかと思いきや、契約で行った飯場は大体途中で投げ出してしまふ。この日の前日も、10 日契約の飯場を 3 日働いただけで飛び出して帰ってきたばかりで、全くお金を貰っていなかった (2000 円だけ前借りしたらしいが)。こうしたことがよくあるらしく、かなりただ働きをしている。仕事の回数ほど稼ぎはないようである。

また、かなり悪い待遇の飯場が多いようで、ほとんどお金にならないことがよくある。ちょっと前にいった千里の I 建設などは、2 日働いて 1000 円しかくれなかった。こういうことが多いため、もう飯場はやめて現金ばかりでやっていこうと思っている。(Case 35)

■その他の仕事

現在の仕事はシェルター内で出されている仕事のみである。公園の清掃や警備で、時給 700 円である。4 時間で 2800 円。6 日に一回の輪番制なので、月にしたら 14000 円くらいである。「14000 円でたばこ (わかば) と食費とまかなってる。たばこも昔はロングピース吸ってたけど今はな。食費が 8~9000 円かな、一日 300 円足らずや。もう極貧生活よ。でも 14000 円でも暮らしていけるんや。たばこ吸って朝夕ご飯食べて。まあ人は『信じられん』言うやろが」。(Case 42)

「シールとか集めてるんよ。」

「シール？」

そこには、懸賞品を応募するように自動販売機の横などに置いてある、シールを貼って出す葉書が。

「え、懸賞品生活っていうことなんですか？」

「ちがうよ。あまり大きな声では言われへんけど、そういうシールを 1 枚 5 円くらいで買ってくれるところがあるの。」

「1 日シールってどのくらい集まりますか。」

「隣にいる人と一緒に集めてるのよ。1 日だいたい 300 枚くらいかな。」

いろいろな懸賞用のシール一覧がはっているシートを見せてくれる。一つ一つに、1 枚〇円と書かれている。値段が一番高いもので 7 円、安いもので 4.5 円と書かれていた。

「1 枚の値段が 7 円のものもあるんですね。」

「そう、あんまりでまわっていないシールは 7 円くらいするものもある。でも A みたいによく出回っているのは 4 円 50 銭くらいなの。それ以外にも B (飲料メーカー) のシールもあるけど。」

(Case7)

現在は中央卸売市場で野菜を買って、それを公園の近所にある団地で売って生活費にしている。

月に7、8万円になる。

聞き取りに行ったときはいもかなにかを袋詰めしていた。また聞き取りをした後もう一度そのテントの前を通ったが主婦らしきおばちゃんはそのテントを取り巻いていた。このテントに直接買いにきているのかもしれない。(Case 26)

③仕事をしない(できない)理由

現在「仕事」をしていない(できない)人11人について、仕事をしていない(できない)理由を見てみると、「体力的な理由」、「他からの収入」の二つをあげることができる。

■体力的な理由

「野宿生活の実態とか、仕事に関する要望とか聞かせてもらいたんですけども。」

「わし、もうどうやって死のうかと考えているから、仕事をする気はないんや。」

「失礼ですけどおいくつですか？」

「65歳や。体もえらいんでもう仕事しようとは思わない。」

「体がえらいんだったら、生活保護とか福祉事務所に申請にいかないんですか？」

「救急車さえ呼んでしまえば病院に行って福祉にかかることができることは知っている。65歳だから生活保護をうけれることも知っている。けどそれは最終の手段であるので、今はやりたくないと思ってるんや。」

「じゃ、今は仕事は？」

「空き缶をときどき集めるけど、ほとんど仕事はしてない。」(Case 11)

■他からの収入(貯金・年金・支援)

貯金が多くあったため、野宿をしてから働いたことがない。アルミ缶集めなどもしていない。貯金はそろそろ尽きるのであるが、「長生きしても仕方ない」と、先のことは考えていなく、どんな仕事でも働く気は全くない。(Case 20)

現在は年金(約20万円)をもらっており、厚生年金、年金基金と二つかけてあった。現在住所を確保しているので年金を受給している。

年金があるので仕事はしていない。(Case 25)

つぎに、現在仕事をしていないが、何とか食いつなぎ生き抜いているという事例を紹介する。

■生き抜く

「でも、ま、何とか食べて。」

「そうや、贅沢しなかつたら、何とか生きていけるわ。あれ食うや、これ買うわ言い出したらきりがないからな。パン屋さんのパンでいいんや。パンがいやだったら、売れ残りのお弁当もでるしな。賞味期限きれたような弁当やけどな。でも冬場やったら何とかいける。夏場、ちょっと春になりはじめると糸が引っ張りはじめよる。そんな弁当食べられへんがな。臭いもしよるし。大概へんな臭いしよるし。」

「で、そんなので食あたりしたことはない？」

「若い頃したことあるけどな、一度したらな。そらやめとけということになるわな。なんぼええ弁当やゆうても食べへんようになるわいな。」

「じゃ、炊き出しなんかは？」

「行ってない。炊き出しいくんやったら、スーパーマーケットとかな、ゴミ箱とかの方がましや。弁当ほかしてくれるもん。」

「あ、そっちの方がいい。」

「う～ん、自分の好きな物たべられるやろ。」

「ここらへんやったら食べ物？」

「ここらへんのはいい物はない。」

「じゃ、普段どこまでいきはるんですか？」

「市場。あすこがええのだしてくれるんや。競りが終わってからの、腐っているやつやらな、半分かけたやつやらな、そんなんがあるんや。みんな行きよるからな。たかつとるは。表で待つとるわいな。まだかいな。『もうええぞ〜』って言ったらばつとな。」

「持っていってもガードマン何もいいませんか？」

「『あ〜、また来たんか。』って感じやで。そのかわり、山になっているところな崩さないように、手を突っ込んでな、これは食べれる物やっていうのだけとって、散らかさないようにしないといけないんや。あとは、向こうの清掃屋がな、バケツみたいなもので、ブーっと持っていきよる。」

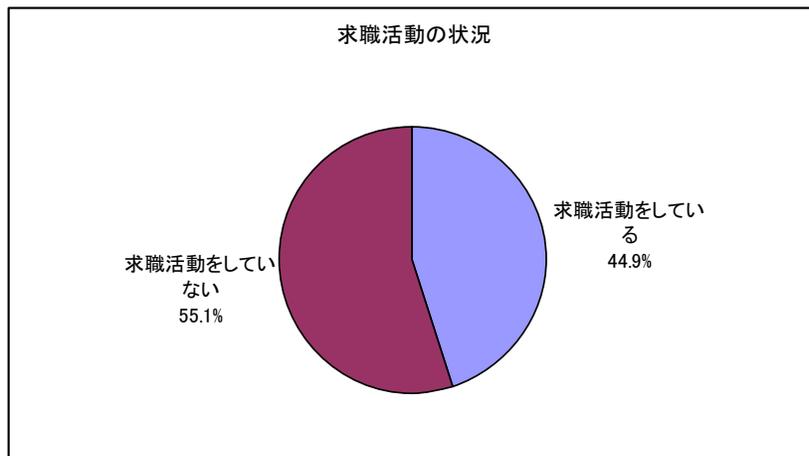
(Case 13)

(4) 求職活動

①求職活動の有無

現在何らかの形で求職活動をしていますか、という質問に対して約 45%の野宿生活者が求職活動を行っている（図 2-5）。

図 2-5. 求職活動の状況



②求職活動をしない（できない）理由

現在求職活動をしていない 27 名について、求職活動をしない（できない）理由をみると、以下の 6 つに整理することができる。

- 病気・体力がない
- 仕事がないから
- 今の生活で手一杯
- 求職意欲減退
- 友人や犬の面倒をみている
- 借金がある

③求職活動の手段

現在、限られた社会資源しか活用できないような状況で、どのような手段を用いているのだろうか。以下5つの項目について、事例を紹介する。

■西成労働福祉センター

「最近センターに仕事探しにいったの？」

「掃除（特別清掃事業）の番号だけかな。土工とかの仕事とかにも就きたいとは思っているけど、年齢でだめだから、今はあきらめている。それに年が年だから、あまりきつい仕事には行けないし。」（Case 7）

現在、西成労働福祉センターや人夫出しを通じて仕事を探している。しかし、西成労働福祉センターは「100%ない。まあひやかしに行ってるようなもんやなあ」。新聞の求人広告などで仕事を探して就いたことも以前はあったが、求人広告などは年齢制限がきついので現在は見ていない。（Case 38）

■職業安定所

仕事は職安や新聞などで探しているが、職安にいても求人は平均40代までで就ける仕事はない。「行政はおもてむきはいいこという」。（でも仕事ないし、どうにもできないのところがうかな。）（Case 26）

「仕事どこで探しはったんですか？」

「阿倍野のハローワーク。でも仕事なかったな。」

「どういう理由であかんかったんですかね。」

「アパートに住んでいないから、連絡先がないとだめとか、保証人がいないからだめとかやな。今は探しに行っていないけど。」（Case 37）

■新聞・雑誌

基本的には読売新聞やスポーツ新聞や広告の求人欄で仕事を探しているが、野宿をしているときに仕事をみつけてスーツを着てきれいな格好で面接にいったが野宿をしていることがわかると態度が変わり、イメージが悪いからダメだと言われた。この人はそこで「勤めたらどっかに住む」といったが不採用だった。（Case 3）

■知り合い

「昔一緒に基礎（工事）やってたやつに頼んでいるけど、あかんな。」（Case 24）

■直接雇用主に

現在も仕事を探している。しかし「新聞なんか買うてないしなあ、たまに新聞が捨ててあるじゃない。それ見ても、まあ無いよ。どれもこれも『45歳まで』とかね。それで、街を自転車で廻るんよ。ぐるぐると。でもなかなかないね。直接行って住み込みを希望しても、『二人はだめ、一人ならええけど』って断られる。これ（奥さん）がおらんくてわし一人ならどうとでもやっていけるんやけどな。でもこれを放っぼっていくわけにはいかんしな。一人で野宿さすわけには。」（Case 40）

「そっか。で、全然求職活動とかは行ってはらへんの？」

「行ってる。去年年末にその運送会社に配送のアルバイトさせてほしいって言いに行った。でも居住地がないからだめって言われた。」（Case 43）

(5) 就労ニーズ

①希望の仕事

(希望の職種)

表 2-3 は希望の職種について分類したものである。最も多かったのは、生産工程・労務の職業、つまり野宿生活者が今まで就いてきた、製造業や建設業関係の仕事に対する要望が高くなっている。

表 2-3. 希望の職種

希望の職種	人数	比率1	比率2
専門・技術的職業	2	4.3%	5.4%
サービスの職業	3	6.5%	8.1%
保安の職業	4	8.7%	10.8%
運輸・通信の職業	4	8.7%	10.8%
生産工程・労務の職業	18	39.1%	48.6%
その他	5	10.9%	13.5%
何でもよい	3	6.5%	8.1%
選択者総数	39	84.8%	105.4%
有効回答者数	37	80.4%	100.0%
無回答	9	19.6%	
合計	46	100.0%	

ここで母数が 46 名になっているのは、4 名「(現在の仕事以外に) 他の仕事につきたくない」と答えたものを除いたためである。「他の仕事に就きたくない」と答えた理由は後で触れる。「その他」に分類されているものは、高齢者対象の軽作業、体力にあった仕事などがあげられる

(希望の就業形態)

表 2-4 はどのような就業形態(常雇い・臨時・日雇)を希望するか、について集計した結果である。希望の就業形態で目立って割合が高いのは、「常雇い」で 6 割を占めている。

「臨時・日雇」と答えた人の中には、安定した「常雇い」で働きたいが体力がもたないから、「常雇い」より少ない時間で働ける「臨時・日雇」と答えている人も少なくない。

表 2-4. 希望の就業形態

希望の就労形態	人数	比率1	比率2
常雇い	21	45.7%	60.0%
臨時	8	17.4%	22.9%
日雇	8	17.4%	22.9%
選択者総数	37	80.4%	105.7%
有効回答者数	35	76.1%	100.0%
無回答	11	23.9%	
合計	46	100.0%	

希望の職種と同様、母数が 46 名になっているのは、4 名「(現在の仕事以外に) 他の仕事につきたくない」と答えたものを除いたためである。

(希望の収入)

「最低どのくらいの収入が必要だと思いますか」という質問に対して、希望の就業形態で常雇いを選択している人は月給 10 万円から 25 万円で、平均 16 万 6 千円、また、臨時を選んでいる人は月給 8 万円から 10 万円で、平均 9 万 6 千円、日雇を選んでいる人は日給 6 千円から 1 万 3500 円で平均 1 万円という結果が得られた。

(就労ニーズの具体例)

■自分の技能・技術を活かしたい

希望の職種は昔自分が専門にしていた仮枠(家の基礎)大工である。当時は本を読んだり、積極的に親方に聞いたりして勉強したので図面も読める。10年かけて一人前になった仕事であるため、資格はないが、「腕を見てもらえれば」と自信ありげである。そういった仕事がなければなんでもいいが、警備のようにじっとしている仕事は嫌で、働いている実感のある体を動かす仕事の方がいい。常雇いとは言わないが、パートのようなもので月10万貰えたら十分である。(Case 19)

もしつぎあたらしい仕事に就けるのなら昔身につけた印刷をもう一度したい。56歳だから体に負担がかからない程度で。賃金は家賃などの生活費を考慮にいと最低20万円はいるだろう。(Case 26)

仕事の希望は、自立支援センターへの入所手続きをしようと考えているものの、今後も釜ヶ崎の日雇いを続けたいと考えている。賃金はやはり最低でも定められた13500円はほしい。現在の賃金はおかしい。(Case 34)

フォークリフトの免許があるので、土方は嫌だがフォークリフトなら暖かくなったら(4月くらいから)やりたい気持ちもある。ダンプはこの耳では危ないが、フォークリフトならいけそうだからだ。場所は西成でもどこでもいい。できれば常雇いで月10万は欲しいところである。また、最初は前貸しをさせてもらうことが望ましい。行政に望むのは仕事の紹介と身元の保証である。「電話も家もなかったら(企業は)雇ってくれないんじゃないですかね」という不安があるからである。(Case 18)

■体力にあった仕事

「...生活保護をもう一度受けたいな...生活保護を受けたからといってじっと家にいるんじゃないくて、仕事も探しに行きたいからな。」

「どんな仕事につきたいですか？」

「そうやな、年も年やから仕事ないかもしれないけど、体に無茶苦茶負担がかからないような仕事を探したいな。掃除みたいなのがええな。長時間じゃなくてな。」

「やっぱり、体えらいから、体力にあった仕事がいいですか。」

「そうやね。」

「給料が高いとかよりも。」

「そうやな。」(Case 30)

土工として働きに行って体がいうことをきかないことを実感したことも関係しているのか、就きたい仕事は体に負担のかからない軽作業とのことである。常雇で働きたいと考えている。「もう60歳のおじちゃんやで」。具体的に挙げるなら可能性も考えてガードマンとのことであった。月給は20万円あればとのことであったが、「月15万あったらドヤ泊まって三食買って食べてもワシ絶対生活していけるからなあ、月15あったら」とも語っている。(Case 38)

■みんなで仕事を分け合う

「今の仕事が一日2800円で六日に一回。それを三日に一回にまわせたらな。わしにしても基本的には人から面倒見られるのはいやな質や。でも行政も『支援』言うて取りかかるんやったらしっかりしたことをせな。今はそんな姿勢は見れないよ。もっと大局的に、大きい見方でやらなあかんよ。人数も多いんやから、(賃金も労働時間も)少なくともそのみんなに仕事が廻るように、大阪市の抱えている仕事を活用しなければいかん。いくら景気が悪いと言っても行政に全く仕事がないわけじゃないだろ。.....例えば今一人8時間している仕事があるなら、それを4時間ずつに

分けたら二人が仕事に就けるやろ。...みんなで分けあって。それにいくら仕事あつせんしても、しっかりお金貯められるようなサポートがなくちゃだめだ。生活保護にしてもその後までサポートがないと。周旋屋が金取ったりあるしな。打ち切られてまたテントへ戻るんじゃ意味ないやろ。ちゃんと人の事情をみてそれに合うようにしなくては」。...行政が抱えている軽作業をみんなに回るように出して欲しいとのことだ。(Case 42)

今までのように、自分が希望する仕事というよりは、現在これだけ増加している野宿生活者全体という視点から、希望の仕事を答えている事例である。これ以外にも、労働者として現在の状況を何とかしたいと考えている事例を一つ紹介しておく。

今の仕事は1万5千円くらいの仕事をしている。とびのピーク時は4万円単価だった。単価を下げているのは、今働いている奴らや。アオカンしている人が働くから、そんな桁落ちの飯場がなくなへんや。仕事にみんな行かんかったら、単価はあがる。もうアオカンしてるねんから、半年位我慢したらええんや。ストライキや。(Case 16)

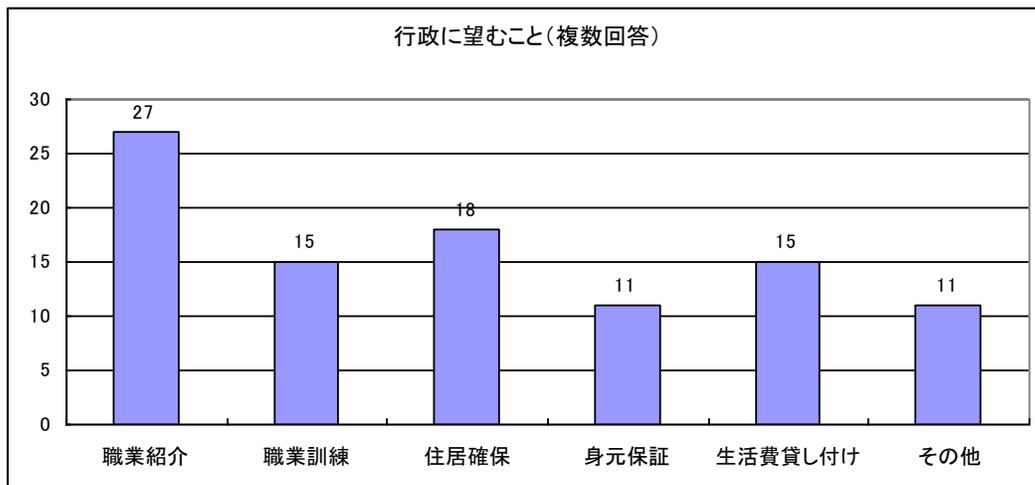
(他の仕事には就けない)

今回聞き取りをしたうち、4人から「何かつきたい仕事がありますか」という質問に対して、「他の仕事につきたいと思わない」という答えを得た。4人のうち2人は、高齢ということもあり、生活保護を受けられるまで何とかしのげればという理由で、就労に対する要望がなかった。1人は、「借金がなくなる限りは、借金取りが取り立てにくるので仕事に就くことはできない」と答えた。もう1人は、現在の場所で野宿する前に、自転車で四国88ヶ所(しかも2周半)を、1日2500円の野宿生活でお遍路していた。その時人生について色々考え、就労ニーズについて「どんな仕事でも働く気は全くない」と回答している。

②就労にあたって行政に望むこと

図2-6は、行政に何らかの要望を持っている40人の傾向を見たものである。行政に対して最も望んでいることは「職業紹介」であることが分かる。また、一人当たり幾つの選択肢を選択したかをみてみると、2.4と、複合的な支援を望んでいることが分かる。

図2-6. 行政に望むこと



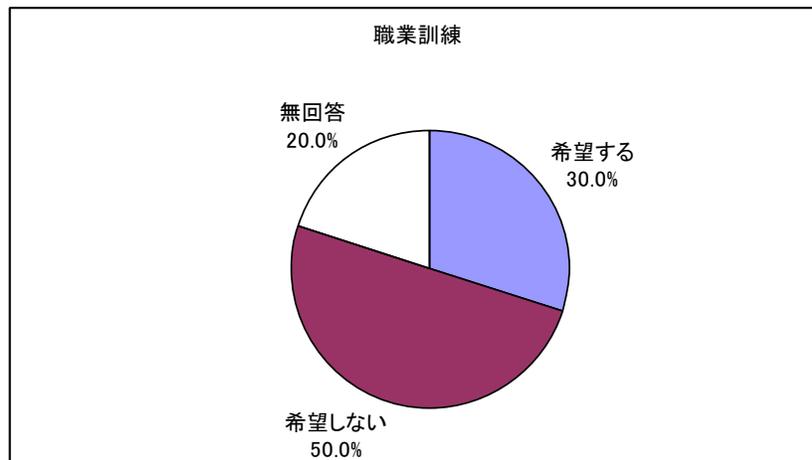
(職業紹介)

行政に望むのは仕事の紹介と身元の保証である。「電話も家もなかったら（企業は）雇ってくれないんじゃないですかね」という不安があるからである。(Case 18)

(職業訓練)

「新たな職業につくために、職業訓練を受けますか」という質問に対して得られた結果が図 2-7 である。「希望する」と答えた人の割合に対して「希望しない」と答えている人の数が多い。

図 2-7. 職業訓練



「もし、職業訓練を受けますかっていったら？」

「そら、仕事に就けるんやったら、訓練うけるで。わしかってやらなあかんことはやるで。」

(Case43)

「とにかく仕事がないのが問題なんやで。」

「そうか。で、仕事につくために行政にのぞむことは？」

「そら、仕事を紹介してくれることやろ。」

「職業訓練とか、住むところとか、身元保証とか、ありませんか？」

「仕事がなかったら、どれとっても話にならんやろ。仕事がないのに、そんなことしてくれても、すぐまた野宿やで。だって生きていかれへんもんや。そう思うやろ。」

「そうやね。」

「そもそも仕事紹介してくれるんかな？」(Case 24)

(職業訓練を希望しない理由)

■技術・技能を持っている

仕事に役立つような特別の技術・技能を持っていると答えた人(22人)と、持っていないと答えた人(23人)はほぼ同数であった。

また、どのような技術・技能を持っているのかと具体的に見ていくと、普通・大型・特殊・二種免許など車関係のもの、フォークリフト、玉掛けなどの建設業関係のもの、それ以外にも、金属溶接、アーク溶接、旋盤の免許、調理師免許、印刷関係の技能、クリーニング関係の技能を持っているという回答もあった。

現在、技術・技能を持っていても、新しく職業訓練を受けたいと答えている人がいる。

■年齢が高い

「職業訓練受けても同じやろう思う。60 やったらな。現実で現場で『どんなに仕事やったんや』って聞かれたら、『まだ、やってない。』って。技術持っても、持っていないのと同じや。職業訓練身に付けたからって言って、仕事がなかったらな。50 歳くらいやったらまだなんとかできるかもしれないけど、60 歳やったら、『もうええよ』ってな。どんなに技術があってもな。」(Case 13)

「だってもうこんな歳で今更何訓練するのよ。もっと若かったらやろうかなあと思うかも分からんけど、この歳なるとなあ。」(Case 38)

■職業訓練を受けても仕事があるとは限らない

「職業訓練を受けますか」という質問に対して、具体的にどのような技術・技能を身に付けることができるのか、具体性に欠けていること、また資格を取った後仕事があるのかどうかという先の見通しの甘さについての指摘などをする事例もあった。

職業訓練については「ワープロやパソコンとかあってもね、自分にあうものがもしあれば考えるけど。」(Case 42)

「で、新たな仕事に就くために職業訓練受けますかってどう？」

「仕事がないのに、訓練しても仕方がないやろ。仕事があって、この資格取ったら必ず仕事につけるっていうんやったら、話はべつやけどな。」(Case 24)

「職業訓練とか自立支援何とかというの、役人の連中が言うてたけど、そんなんはねえ。他の人と一緒におらないかんからというわけではないけど。入りたくないね。特別な技術や技能なんてないけど、今までこれでやってきたんやから。そんなんせんでもええから、仕事増やさないとね。やっぱり不景気なんは、行政が悪いんと違う。何望むっていうたらやっぱり仕事増やして欲しいってことやね。職業訓練とかいらんから仕事増やしてって。今までそれでやってきたんやから。...仕事ないならそんなのはいらんよ。」(Case 10)

(住居確保・身元保証・生活費貸し付け)

仕事に就くために行政に望むこととして、「住居確保」、「身元保証」、「生活費貸し付け」を選択した事例をみると、この3つの項目のいずれかだけを選択しているケースは少なかった。「職業紹介」と一緒に選択している場合が大半であった。

「このまえも仕事あったんやけどな。」

「そこのA公園の草抜き」

「でも住むとこないからあかんかった」(Case 2)

仕事についての要望を聞くと仕事は探せばある。でも部屋を借りようと思っても給料は月末にしかでないから部屋を借りても生活費もないし、家賃を払えない。かといって野宿では就職できない。(Case 4)

行政に対するニーズは「そりゃ、出来ればいいけど、現実難しいな」。...住居についても難しいだろうが希望ではあるという。身元の保証は「確かに仕事に就くときに保証は欲しいけれども、行政がすることで、かえって雇ってくれないんじゃないか。大きな企業なら特に。そこで差別が発生するんじゃないか。ここにいることを向こう(雇い手)が知ればなかなか難しいやろう。」(Case 42)

(提案)

行政に望むことの中には、野宿生活者自身から様々な提案があったが、「何らかの職業紹介の組織を作って欲しい」との強い要望があった (Case32)。一般には、職業安定所があるのと思う人がいるかもしれない。だが彼の言葉の中には、既存の職業紹介所から、「住居がない」、「身元保証人がいない」など様々な理由で排除されている、その結果、労働市場に戻ることもできないという、野宿生活者が現在置かれている状況をも背景に含み込んでいると思われる。

以下にあげる二つの事例は、職業紹介に含まれるとは思ふ。しかし、特に、個人の状況にあった仕事を紹介してほしいという声が強かったので、あえて抜き出した。

「仕事について就労自立するために行政に何を望みますか？」

「行政に対しては感謝している。...シェルターに入らせてもらっているし。確かに今の生活は最低だと思ふよ。高齢者でもできるような仕事をもっと増やして欲しいとか、いろいろ思うところはある。言い出したらきりがないと思う。...」 (Case 37)

「でも、もし、寝ているところを役人さんがまわって仕事を紹介してくれるんだったら、建築の仕事に限らなくてもいいと思う。もちろん建築の仕事もあると思うんだけど。でも年齢が年齢だから、体力的にね...。でも日雇だったら自分の体力にあわせていけるからいいと思う。釜ヶ崎に行ったら仕事につけるような状況にしてほしい。」 (Case 7)

(年金)

現在までどのような雇用状況の仕事に従事してきたかということ把握するために、年金を支払った経験があるかどうかについて調べたところ、有効回答者 30 人中 19 人が支払ったと回答しており、支払い期間を見てみると、5 年に満たない事例もあるが、20 年近く、もしくはそれ以上支払っている事例が多かった。

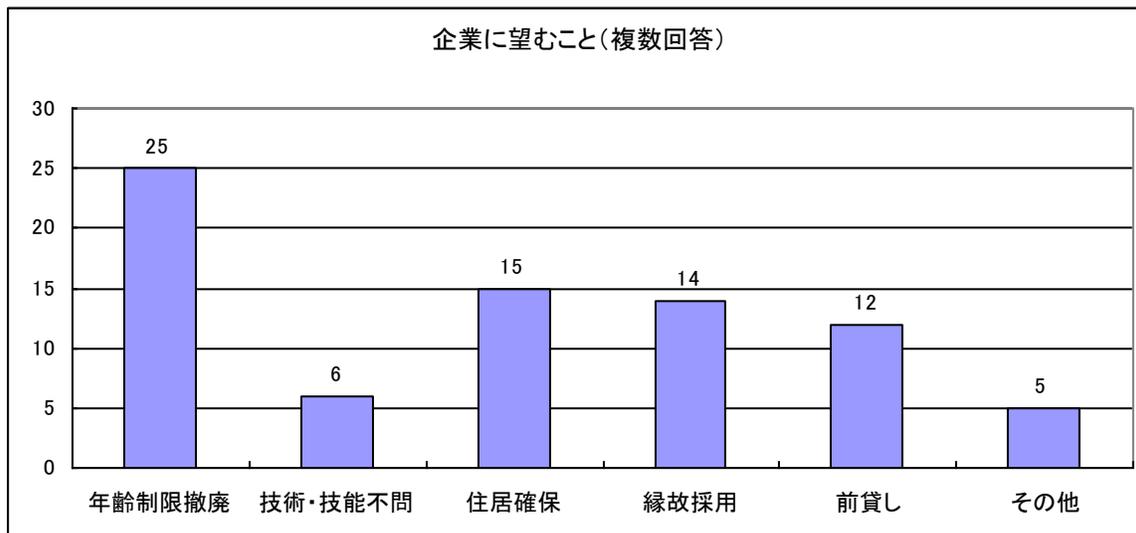
14 年間年金をかけていたので何とかおかないかと相談に役所へ行ったことがあるが、戸籍謄本がいるだの色々めんどくさかったので諦めた。戸籍謄本を手に入れるなら実家に帰らなければならないが、長年あっていない親兄弟には今さら会えない。よって実家には帰れないという。一時金はあると言われたらしいが、「はした金集めて 2、3 ヶ月生きたところで仕方ない」と思ったのである。しかし、「まあ俺も人間だからいざとなったら (生きたくなくて) どうするかわからねえけど」と付け加えた。(Case 20)

上の事例のように、一時金を受けたいのにどうしたらよいかわからない、また、一時金を受ける権利を持っていることさえ認識していない事例が多かった。

③企業にのぞむこと

次に、仕事に就くために企業に何かを望んでいると回答した 35 人について分布を見てみる (図 2-8)。「年齢制限」をなくしてほしいという回答を選択している割合が高いことが分かる。また、一人当たりの選択数を見てみると、2.2 と行政よりは若干少なくなっているものの、企業に対しても複合的な支援を希望していることが分かる。

図 2-8. 企業に望むこと



(年齢制限の撤廃)

企業に対して、多くが答えた「年齢制限をなくしてほしい」という要望は、今回話を聞かせてもらった野宿生活者が、野宿する前、野宿してから、求職活動にいったときに経験した不採用理由なのだろう。

ホテルの清掃の仕事もいまでは年齢制限が厳しくなっているという。むかしはむしろ年寄りの仕事であったようで、清掃の仕事をやり始めたころ面接に行くと若いのにと言われたこともあるという。いまでは50歳未満でないと雇ってくれないという。ある時面接にいくと一人の募集に50人面接にきたという。若い人のあいだではまだまだ仕事があるようだが、年寄りのところにはないことをしきりに言っていた。

...行政には頼りたくないのだから仕事は自分で探す。企業にも望むことは年齢制限をなくしてほしいことと前貸ししてほしいことで住居は自分で探すということだった。(Case 3)

行政に望むことは、4~5千円でいいので最初の給料までの生活費を貸してくれること、企業に望むのは年齢の制限をなくしてくれることである。55歳までという仕事は良く見受けられる。57歳の氏くらいが最もつらい年齢であるということだ。(Case 19)

(住居確保・縁故採用・前貸し・技術、技能不問)

新聞で仕事を探しても年齢制限があり、また住み込みを希望して「二人連れはだめ」と断られるなど、どうしても新たな仕事に就けない。(Case 40)

上の事例は夫婦で野宿生活を余儀なくされている。よって、自分だけの生活だけではなく、奥さんと一緒に生活できる住居提供を希望している。

仕事に就くための行政に望むことは、仕事の紹介、住居の確保、給料が出るまでの生活費の貸し出しである。企業に望むのは年齢制限をなくし、住居の確保、給料の前貸しである。(Case 27)

上の事例のように、先ほど述べたが、行政にのぞむことと企業にのぞむことが重複している事

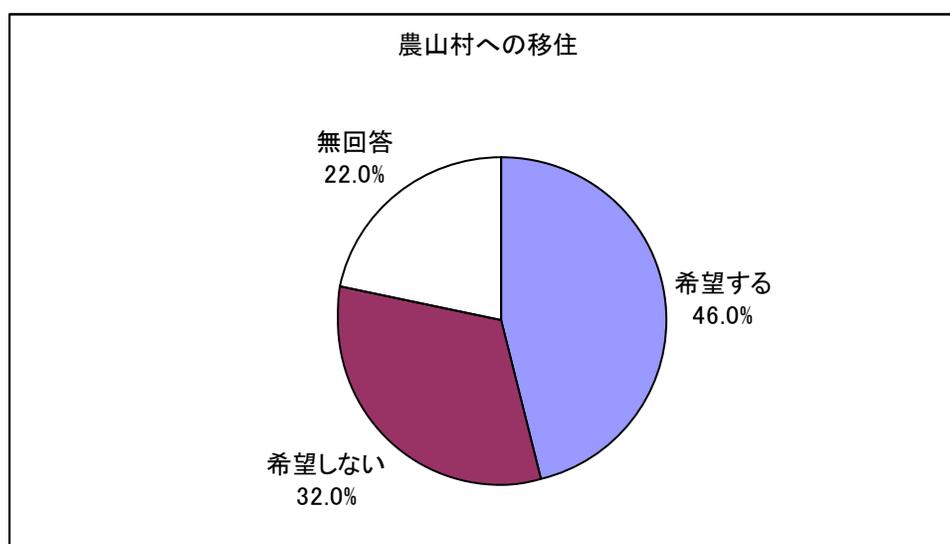
例が多かった。

企業に対しては、年齢制限をやめてほしい。技術・技能をとわないでほしい。顔付けに関しては仕方がないが、顔付けでいけるとはなく、顔付けがなければと思っている。(Case 34)

(6) 農山村への移住

次に、自立支援センター入所者の中には「農業への従事」を希望する人もあり、新たな労働市場としての農村移住について考えていきたいと思う。図 2-9 は「新たに農山村へ移住し、就労・生活していくことが可能であれば行きたいと思いませんか。」という質問に対して得られた答えを集計した結果である。

図 2-9. 農山村への移住



① 農山村移住希望する

「もし、農村で、ちゃんと畑とか田圃とかがあって、生活が成り立つとしたら、農村に行ってもいいと思いませんか？」

「行きたいと思うよ。」

「農業やったことありはるんですか？」

「あるよ。小さきときにやったな。育ての母親が小さな畑やってたのを手伝っていた。…」

(Case37)

また新たに農山村に移って仕事をする事については、「そりゃあ、できたらぜひしたいわ。田舎がええよ。都会は疲れるしね。若い時分は都会にあこがれたりしたけども、年とったら田舎で仕事しながらゆっくりしたいよ」。(Case 40)

② 農山村移住を希望しない

次は、大阪で生まれ育ち、農業の経験がないので、農山村の生活を希望しない事例である。

「もし、農山村で生活が確立されるとしたら、農業やってみようと思う？」

「いや、思わんな。農業は誰でもできるとは思わんな。わしみみたいに大阪で生まれて、一度も農

業をやったことないやつには、無理なんちがうかな。」

「やっぱりそうかな。」

「そう思わんか？そんな農業もあまくないやろ。」(Case 24)

農山村での就労については「農業なんてしたことないで。でも考えるよ。ちゃんとできるんやったら」。それで確実に生活していけるのならという話である。(Case 45)

上の事例のように、農業で確実に生活できるのかという不安は聞かれた。

実家は農家のように地方で農業などをしますかと尋ねると、田舎に帰れば農業はできる、でも今農業じゃ生活することはできんと言っていた。昔は高く買ってくれたからちょっとつくっても生活できたけど今は米安くてたくさんつくってもお金にならないと言っていた。(Case 23)

また、過去に農業に従事していた人でも、かえって農業に従事していたからかもしれないが、農業で生活していくのは難しいのではということ話を話してくれた。

このように、生活を確立することへの困難さは、決して「農村移住」に限ったことではないと思われる。しかしながら、彼らがこのような不安を抱くのは、「経験がない」仕事をしなければならぬからだけなのだろうか。不安を抱くその背後には、野宿生活者が低賃金（ときには無給）で都合の良い労働力として利用された、もしくは利用される可能性があるという問題を含んでいるからではないだろうか。

以下、釜ヶ崎から飯場に仕事に行き行って不当な条件で仕事をさせられている事例を紹介しておく。

仕事があっても賃金はだいたい1万1500円。9000円のところもあった。このあいだは1万円/日で飯代3800円、そのほか3000円とられて、一日3200円しかのこらないところがあった。

この日も姫路の高速道路の橋桁の工事に行ったものの残業が多く、朝出に残業をしても時間外がつかないのででてきたところだった。

最近は本当にひどい場所が増え、二級の印紙を貼るところもある。(Case 34)

先の「(5) 就労ニーズ」でも述べたが、野宿生活者自身、決して安価な賃金で仕事に就くことを望んでいるわけではない。現在の仕事に就けない状況よりは、低賃金で働く方がましなだけであって、決して望んではいないのだ。

就労による自立をするためには、農山村に行って農業研修を受けようと思うだろうが、それを悪用し低賃金（もしくは無給）で労働力を獲得する組織が生まれてきたときどう対処するか、そして、実際農山村に行った後、何らかの理由で戻ってきたいと考えたとき、いつでも戻ってこれる（受け入れる）ことができるような施策が必要ではないだろうか。

(7) 野宿生活者自身が考える就労困難理由～なぜ仕事につけないと思いますか～

野宿生活者自身が仕事につけない理由として、最も多かったのが「求人年齢と自分の年齢とがあわない」、次いで、「身元保証できない（住居がない・連絡先がない・身元保証人がいない）」、「条件にこだわっていないがとにかく仕事がない」をあげている人が多かった。

また、選択総数を見ても分かるように、一人あたり約3つの理由をあげている。つまり、仕事に就けない理由の一つとは考えておらず、複合的な原因と思っているのではないだろうか。

表 2-5. 仕事に就けない理由

仕事に就けない理由	人数	比率1	比率2
賃金・給料が希望とあわない	2	4.0%	4.7%
年齢があわない	33	66.0%	76.7%
希望する種類の仕事がない	11	22.0%	25.6%
免許・技術・技能を持っていない	8	16.0%	18.6%
自分の知識・技能を活かせない	6	12.0%	14.0%
身元保証できない	21	42.0%	48.8%
住民票不在	6	12.0%	14.0%
生活費がない	13	26.0%	30.2%
とにかく仕事がない	18	36.0%	41.9%
その他	6	12.0%	14.0%
選択総数	124	248.0%	288.4%
有効回答者数	43	86.0%	100.0%
無回答	7	14.0%	
合計	50	100.0%	

■年齢

今回聞き取りをした野宿生活者の大半が、仕事につけない理由として「年齢」をあげていた。今回の調査協力者の平均年齢が 56 歳であることを考慮するなら当然の結果なのかもしれない。

■とにかく仕事がない

「とにかくいまは不景気で仕事がないので仕事ができるまで待ってる」

行政にはとにかく仕事を斡旋してほしいとのことだった。いい仕事（ピンハネとかされない仕事）がほしい。（Case 9）

「なんで仕事につけないと思います？」

「そら、仕事がないからやろ。とにかく仕事がないもん。確かに、年も問題やけどな、それ以上に仕事がないわ。」

「他に、野宿してはって、住所とか連絡先がないから、仕事につけないとか？」

「いや、それはちがうと思うで。紹介してもらってからの話とちがうか？紹介してもらって仕事もないような状況で、どうしろっていうんや。そう思わんか。原因は、仕事がないことが一番や。紹介してくれる仕事があって、その次に、年齢、そして賃金の問題があると思うけど。ちやうかな。」

「紹介してもらえない仕事がないのは、住所がないせいではないの？」

「いや、ちがうは。とにかく仕事がないのが問題なんやで。」

「そうか。で、仕事につくために行政にのぞむことは？」

「そら、仕事を紹介してくれることやろ。」

「職業訓練とか、住むところとか、身元保証とか、ありませんか？」

「仕事がなかったら、どれとっても話にならんやろ。仕事がないのに、そんなことしてくれても、すぐまた野宿やで。だって生きていかれへんもん。そう思うやろ。」（Case 25）

■希望の仕事

コンピューターの会社で長年働いていたが、資格や免許などはない。何よりコンピューターが使えるといっても、そのような仕事の求人はいないばかりで 50 歳を超えた自分のような者は雇ってくれないと言う。「コンピューターのことやったらよう知ってるけれども、まあ免許は持ってないよね。資格とかもないっていうことにしとこか。パソコンでも何でもたたけるんですよねっていうても、年齢がねってなるんですよ。」（Case 21）

「希望の仕事」というのは、上の事例のように、自分が現在持っている知識や技能（上の事例ではコンピュータに関する知識）を活かせる仕事とほぼ同じなのかもしれない。

■複合的な理由

「まあ、求人と自分の年齢とがあわないっていうのが一番やな。住居がないのでっていうのも大きいかなあ。身元を保証できないっていうんとはちゃうかもしれへんけど、ドヤなんか住んどつても、あれは住居じゃないからな。呼び出し電話もしてもらえるけど夕方くらいまでやからなあ。ガードマンとかって『明日行けるか』とか急に入るから連絡すぐつけられんと仕事取れんわけよ」。

(Case 38)

「へんな質問なんやけど、なんで仕事につけないと思います？」

「まず年齢やな。経験があってもあかんねんな。それにかえって、経験があるから賃金が高くなるってことで、敬遠されてるのもあると思うで。それと、家が無いってことや。連絡先がないのと身元保証できへんのと。当然身元保証人なんておらんもんな。」(Case 43)

ほとんどの事例が、上に示したように、年齢と身元保証など複数の理由を選択していた。

以上、「なぜ仕事につけないか」という質問に対して得られた答えをみてきた。ここで、野宿生活者自身が仕事につけない理由として語ったことは、行政や企業に対する要望と対応している。

参考表 調査対象者の Case 番号と属性

Case 番号	聞き取り場所 (市レベル)	年齢	野宿形態	仕事の有無
1	大阪市	56	テント	仕事あり
2	大阪市	65	非テント	仕事あり
3	大阪市	57	テント	仕事あり
4	大阪市	50	テント	仕事あり
5	大阪市	51	テント	仕事あり
6	大阪市	60	非テント	仕事あり
7	大阪市	58	非テント	仕事あり
8	堺市	62	テント	仕事なし
9	堺市	40	テント	仕事あり
10	堺市	59	テント	仕事あり
11	大阪市	65	テント	仕事なし
12	大阪市	63	テント	仕事あり
13	大阪市	60	非テント	仕事なし
14	大阪市	53	非テント	仕事なし
15	大阪市	56	非テント	仕事なし
16	大阪市	54	非テント	仕事なし
17	大阪市	61	テント	仕事あり
18	大阪市	48	テント	仕事あり
19	大阪市	57	テント	仕事あり
20	大阪市	60	テント	仕事なし
21	大阪市	53	テント	仕事あり
22	大阪市	54	テント	仕事あり
23	大阪市	年齢不明	テント	仕事あり
24	大阪市	58	テント	仕事なし
25	大阪市	64	テント	仕事なし
26	大阪市	56	テント	仕事あり
27	大阪市	64	テント	仕事あり
28	大阪市	64	テント	仕事あり
29	大阪市	58	非テント	仕事あり
30	大阪市	69	非テント	仕事なし
31	大阪市	54	非テント	仕事あり
32	堺市	52	テント	仕事あり
33	堺市	49	テント	仕事あり
34	シェルター	43	シェルター	仕事あり
35	シェルター	35	シェルター	仕事あり
36	シェルター	65	シェルター	仕事あり
37	シェルター	61	シェルター	仕事あり
38	シェルター	60	シェルター	仕事あり
39	豊中市	年齢不明	非テント	仕事あり
40	豊中市	51	テント	仕事あり
41	豊中市	60	非テント	仕事あり
42	シェルター	63	シェルター	仕事あり

43	シェルター	51	シェルター	仕事あり
44	シェルター	54	シェルター	仕事あり
45	シェルター	59	シェルター	仕事あり
46	シェルター	49	シェルター	仕事あり
47	八尾市	64	テント	仕事あり
48	八尾市	52	テント	仕事なし
49	八尾市	60	テント	仕事あり
50	八尾市	年齢不明	テント	仕事あり

2-2.求人（雇用）側の対応意識

（1）対象業種

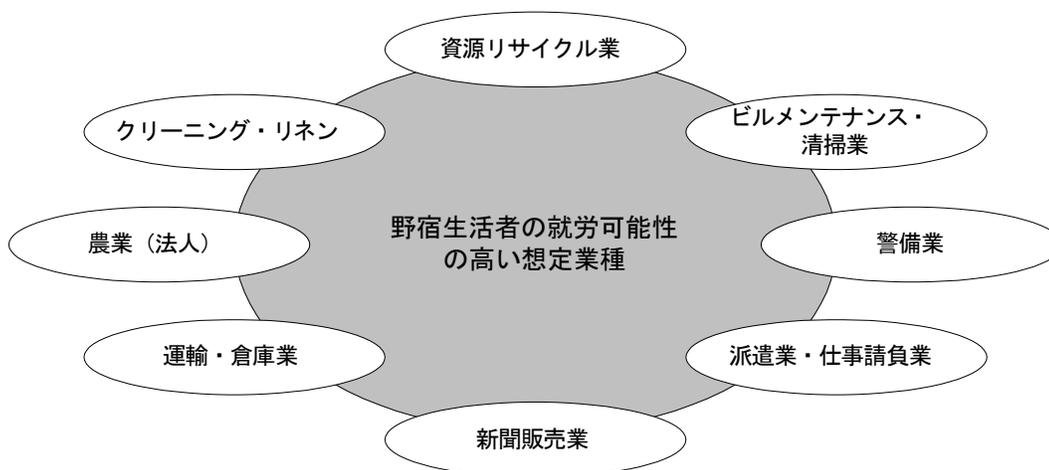
前節では野宿生活者の就労ニーズを中心として、それに留まらず前歴や生活実態等についても聞き取り調査を行った結果について明らかにした。

本節では就労の受け入れ側ー求人（雇用）側の対応意識について企業等へのヒアリング調査を実施し、その結果を示している。

ヒアリングの対象とした企業等の業種には、一定の想定を行った。すなわち、前節でも明らかにしたように、様々な職歴と個人の能力、可能性の面では、野宿生活者にとってはあらゆる業種がその就労先として可能性があることは否定できない。

しかし、野宿生活者自身が就労したい希望職種やこれまで携わってきた前職の経験・ノウハウを活かしたいとの考え、さらには、求人誌等における募集業種、社会情勢等の変化を考慮して、野宿生活者にとって就労可能性の高い業種を想定し、ヒアリング対象とした。

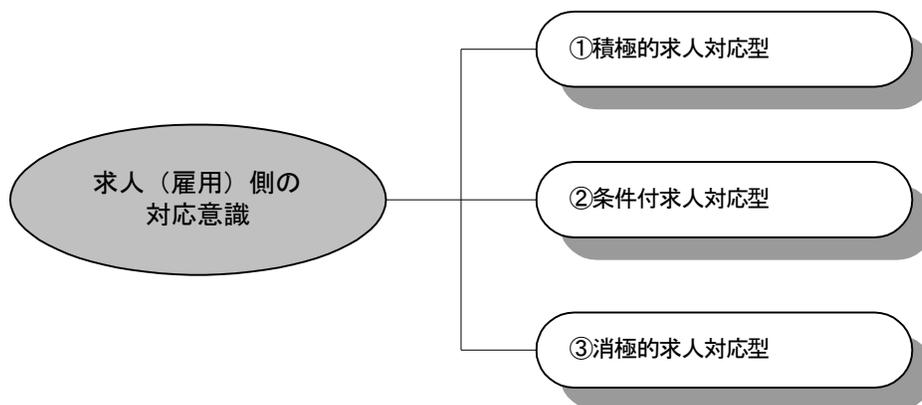
図 2-10. 対象業種



(2) 対応意識の類型化

野宿生活者の就労の受け入れ側の対応には基本的に次の3類型が見られる。一つは野宿生活者を積極的に受け入れようという「積極型」、二つには積極型の対極として受け入れに消極な「消極型」、そして3つには前2タイプの間中に位置する条件付きで受け入れようとする「条件付き型」である。

図 2-11. 受け入れ対応の類型



①積極的求人対応型意識

ヒアリングした企業の中には、野宿生活者を積極的に求人、雇用しようと考えている企業等（あるいは経営者、人事担当者等）、ないしは過去に野宿生活していた人を実際雇用していた経験を有する企業もあった。

こうした企業等は、野宿生活者についての「理解」、言い換えれば、「野宿生活者」一般という抽象的な捉え方をしていない。端的には、その人の「人間性」だとか、労働力としての「価値」の評価—真面目に働くとか、期待に応える働きをしてくれるとか、意欲を持って働くとか—が、評価基準となっている。

業種でみると、資源リサイクル業や農業（法人）でそうした発言が見られた。

②条件付求人対応型意識

ある条件がクリアされると雇用の可能性があるとする企業もあった。例えば、「住所不定でなければ…」 「身元を保証する人があれば…」 「給与の前借りといったことがなければ…」 といった条件がクリアされるのであれば、雇用の「可能性」があるとの発言、考え方である。

確かに、野宿生活者は、生活場所が公園のテントであり、橋の下かもしれないし、貯蓄もなく就職したとしても給料日までの生活費を「就業を継続する」との条件で「前借り」の交渉をせざるを得ないかもしれない。

しかし、野宿生活者にとっては、こうした条件がクリアされてはじめて雇用の「可能性」にたどり着けるわけであり、いわば一般の求職者と同じ土俵に上がれるということである。

こうした企業は、ヒアリングした企業等の中でも多くを占め、例えば、自立支援センターに入所して、これらの条件が整えばかつて野宿生活していた人も土俵に上がり、「勝負」ができるということになる。その意味でも早急な自立支援センターの整備が必要である。

③消極的求人对応型意識

野宿生活者の雇用に消極的な対応を示した企業（人事担当者等）は、野宿生活者に対する「偏見」や「固定観念」－例えば、「彼らは特殊な事情があって野宿生活をしている人」「働くことの意欲を喪失し、家庭・家族を捨て気儘な生活をしている人」等－を持ち、野宿生活者の個々の状況を見ようとせず、一般抽象的な「野宿生活者」像を描き、捉えている。そして、そうした「野宿生活者」とはできれば関わりを避けたいとの意識で、消極的な求人对応となっている。

一方、求人の対象が限定一年齢や免許・資格者、技能者など一されており、多くの野宿生活者が必然的に対象外となってしまう場合も、意図的あるいは意識的とまでは言わないまでも、結果として野宿生活者に就労の可能性を狭めてしまっており、「消極的対応型」意識と同様である。

（３）野宿生活者受け入れの阻害要因

野宿生活者を受け入れる企業側にとってその対応意識については基本的には前項で示した３類型に区分できるが、受け入れの障害となっている要因を整理すると次のような点が指摘できる。

①業種・業界の不活性化と環境変化

業種・業界の景況が厳しい状況に置かれている企業にあっては、一般的に新たな雇用が難しい現実がある。言い換えれば雇用吸収力が低下し、たとえ野宿生活者を雇用する考えはあっても経営的に雇用する余力がなく、逆に人員整理をしなければならない状況にある企業がある。ヒアリングした資源リサイクルの企業では、「実際雇用していた元野宿生活者に仕事がなくなり辞めてもらった」というケースもあった。

今日の建設業界についてもある部分同様のことが言えよう。これまでは建設産業は雇用吸収力も高く、多数の日雇い労働者の雇用を生み出していたが、業界そのものの活力低下あるいは不良債権の処理問題や構造転換の過程にあって、かつてのような雇用を生み出すには至らず、逆にこれまで日雇い労働に従事していた人が職をなくし、野宿生活を余儀なくされる事態となっている。

また、建設産業における単純労働の「機械化」も、マンパワーを必要としていた従来の業界事情と異なる様変わりであり、一定の技能や経験が「職人」としてこれまでは通用していた状況が、ある部分通用しない環境となってきた等の考慮も必要となる。

②住所・身元保証等の要件

野宿生活者にとって、就職の際に求められる「住所」「身元保証」は一般の求職者と比べても大きなハンディとなる。求人（雇用）側は、これら要件が解消すれば雇用の「可能性はある」とする企業もあり、実際、野宿生活者は自立支援センターに入所することでこれら要件をクリアし、面接、就職を実現している人も出ている。

したがって、求人（雇用）側が掲げるこれら要件は解消可能であり、また解消のための早急な対応が必要となる。

③年齢・免許・資格・技能等の要件

求人（雇用）に際して年齢、免許・資格、技能等を採用の要件として掲げるところは多い。こうした要件は、野宿生活者のみならず一般の求職者においても就職実現を困難にしている。

年齢制限については、現在、国会において審議されている雇用対策法の一部改正においても、事業主に求人年齢制限廃止を努力義務とする方向が示されているが、野宿生活者にとっても大きな壁になっており撤廃して欲しいとの声が多い。

また、免許・資格や技能要件については、野宿生活者自身が職業訓練や再就職訓練に積極的に取り組むことで、免許・資格等の取得、スキルアップを図り、クリアしていくことが望まれる

と同時に、そのためには自立支援センターにおける職業訓練のプログラム化、受け皿整備等で実効あるものにしていくことが必要である。ただ、野宿生活者の中で車の免許を失効した人が存在するが、個々の事情において回復措置をとる等の検討も必要ではないだろうか。

④ 偏見および固定観念

野宿生活者に対する求人（雇用）側の偏見および固定観念が、野宿生活者の就職における阻害要因の一つになっている現状がある。

求人（雇用）側が有用な雇用人材を求めることは当然としても、誤った偏見や固定観念により野宿生活者の就職が難しくなっている現状については、その是正が望まれる。

大阪市内だけでも 8,660 人（1998 年 8 月：「概数・概況調査」）の野宿生活者が確認されているが、これを「特殊な事情のある人たち」「気儘な人たち」等の、一般、抽象化された「野宿生活者」では語れないはずであり、個々の「野宿生活者」を見る目、判断する理性が求人（雇用）側に望まれる。また、そうした社会的コンセンサスを図っていくことが必要である。

（４） 求人（雇用）側の対応意識等事例

ヒアリングを実施した企業等の中で、特徴的なところを次に紹介する。

■ A 社…ビル清掃業

●ビル清掃業界の動向

ビル清掃事業者は、大阪ビルメンテナンス協会（約 250 社）に属している。事業者の中にはビル清掃業とは別に警備業も行っているところもあるが、業界としては警備業は別である。また、建設業のように下請・孫請けの関係はなく、役所関係の清掃業務（入札）と民間事業所の清掃業務に当たるところと分かれてきているように見られ、役所関係の業務受託業者は 30～40 社程度である。

業界としては、通常清掃業務はコスト削減で厳しい状況に置かれている。通常業務以外では、大きなイベント（博覧会等）や台風災害等で臨時的に大きなマンパワーを必要とする時には、協会へ要請がきて協会で個別の加入業者へ仕事を割り振ることになる。最近では、淡路花博の会場清掃があつて、博覧会協会から業界団体（清掃や警備）へ要請がきて、ビルメンテナンス協会から当社へも仕事の割り振りがあり、主任クラスの職員とアルバイトで対応した。

●業務内容と雇用者

当社の業務は、ビル屋内清掃業務であり、屋外（庭等）に関わる清掃等は、発注者の要請で作業することもあるが、基本的には別の業者の範疇である。業務形態は、役所や民間からの施設清掃を年間での受託業務が基本である。受託した対象施設に清掃要員を派遣することになるが、清掃要員は当社との 1 年契約（パートタイマー）でその施設の清掃業務にあたるが、実際は長く続いている人が多く、中には 5～10 年継続の人もある。

ビル清掃業務は、基本的には女性中心の業務である。男女雇用均等法の施行で「女性」という募集の仕方はできないが、実際は女性 9 人に対して男性 1 人くらいの割合で、当社が雇用している 50～60 人中で男性は 5～6 人である。

何故、女性中心かということ、トイレ清掃の関係がある。ビル清掃業務にはトイレ清掃は付き物で、一般的に女性は男性トイレに入ることに抵抗はないが、男性が女性トイレに入ることに抵抗がある。力仕事や脚立を使つての高所の作業、夜間作業等は男性でないと難しい面があり、男性清掃員が必要になるが、それは限られている。それと、業務時間が 3 時間程度の短時間のパート作業（時給 800～850 円）であり、主婦層や高齢者が所得控除枠内で働くのに好都合の職種で

ある。また、バブル期にこの業界には人が集まらず、女性の労働力で賄ってきた経緯もある。さらに、清掃対象施設の近いところに居住する人が業務に従事する方が、遠方より通勤して従事するよりも優位ということになり、その意味でも女性のパートタイマーということになる。常雇用者は、パートタイマー10人に対して1人くらいの割合である。

●元日雇建設労働者の雇用経験等

かつて当社でも元日雇建設労働者を雇用して欲しいとの照会が職安からあったが、清掃業務は基本的に対象施設の職員が不在（出勤前）の時に業務を行うわけで、委託者側からは身元のしっかりした人（「住民票が取れる」や「身元保証人がある」）でなければ難しく、その時は、結局職安の人が保証人になるようなことで対処したような記憶がある。

それと、日雇建設労働者は日払いの報酬制でそのことにならされており、当社のような「月給制」では前借りを要求したりして、月払いの賃金制に馴染みにくい点があった。

最近、公園清掃や保育所のペンキ塗り等の業務を「特別清掃」の表示をした車で業務に従事している人を見かけるが、もっとPRしてもいいのではないか。

●野宿生活者の就労可能性

（地下鉄や鉄道駅、地下街、商店街の清掃業務・ゴミ収集）

ビル清掃業務は、女性の職場（女性中心の業務）であり、野宿生活者（男性が多い）の就労の場として一般的に考えることは難しい。しかし、力仕事を必要とするところ、高所（脚立等を必要とする）作業、夜間作業等に関わる清掃業務、ゴミ収集については男性でないといけない。

そうした観点から見ると、地下鉄や鉄道の駅構内の清掃・ゴミ収集、地下街や商店街の清掃・ゴミ収集については、野宿生活者がそれらの業務に就ける可能性が考えられるが、現在、どこがそれらの業務を行っているかである。

大阪市の地下鉄については、OB職員の外郭団体組織が管理（民間業者へ委託）している可能性があり、また、民間鉄道会社では系列の管理会社、清掃業者が業務を行っているのではないかと考えられる。また、それらの業者は学生アルバイトやフリーターを雇って対応している可能性もある。

就労する側（野宿生活者）の対応としては、出退勤時間をきちっと守ることが必要となる。

（公営競馬場や競艇場、大阪ドーム球場等の大規模集客施設の清掃業務）

公営競馬場や競艇場、ドーム球場の清掃業務も既存業者があるだろうが、毎日という訳でなく多くのマンパワーを必要とする点からは臨時雇用的（アルバイト、パート）な形態になっていると考えられる。USJでは清掃員もパフォーマンスの一貫としての位置づけからか、正規の社員となるらしいが、他のテーマパーク（ex.ひらかたパーク等）ではどのようになっているか。

（場外馬券売場の警備やビッグイベントでの警備・清掃業務）

みなみの場外馬券売場の警備員はすごい数であり、彼らも臨時雇用の可能性がある。また、今度、大阪市は東アジア大会を開催する予定になっているが、警備や清掃業務はかなりのマンパワーを必要とし、それらは準備段階から発生する（※ビッグイベントに関わる清掃業務は主催者団体→業界団体→個別事業者への割り振り…期間限定であるため臨時雇用で対応＝淡路花博の例を前述）。ビッグイベントの関係では業界団体への実状把握が必要となろう。

■ B社…運送業

●業界動向と雇用者

運輸業界は、価格競争で厳しい状況にある。横に助手を乗せて走るところはどこもない（野宿生活者をトラック助手として雇用するような運送業者はない）。トラックの運転手一人で北海道から九州まで 24 時間で走る状況である。そうした中で交通事故が起きるのは当然である。現在、1 万人くらいの人が交通事故で亡くなっているが、多くはトラックが関係する事故である。それも、トラックドライバーが事故の怖さを知らなさすぎるためである。

荷を積んだトラックがスピードを出してカーブを切るとき、車輪の状態はタイヤがヘシヤゲてホイールから脱輪しそうになっているのを見ると、誰がスピードを出すなど無茶なことをするだろうか。事故を減らすためにはもっとドライバー教育を考えなければならない。

また、トラックの運転手は免許制（普通運転免許とは別に）になっていないことも問題である。タクシーやバスの運転手は免許制になって、一応、簡単にはタクシーやバスが運転できない仕組みになっているが、トラック運転手は誰でも簡単に運転できる。

●酒類問屋の共同配送システムに雇用創出の可能性

（酒問屋は生き残りをかけて共同配送に取り組むところにきている）

運輸業界で仕事の機会を増やし、業界としてもメリットがあり、問屋の合理化・効率化に役立つ方法がある。それは酒類問屋の共同配送システムである。

かつて、大阪府の呼びかけで酒類問屋やリカーショップ、メーカーなど 120 社ほどが集まって共同配送の検討を行ったことがあったが、結局、事業としては潰れたか、休止状態になっている。うまくいかなかった原因は、事業費が大きくなりコストが嵩んだことと、各問屋が所有する自社倉庫の使い道（活用しなくなった倉庫をどこが使ってくれるのか）が見えなかった点にあった。

また、ビールメーカー大手は 4 社あるが、メーカーが異なると共同配送はうまくいかないなど、酒問屋の閉鎖的な体質、情報が漏れることを嫌う体質に原因があったためと考えられ、現在では酒問屋は一頃の半分くらいに激減している。

これからの酒問屋は、消費者機能を持つべきであり、運送屋にコストダウンを強いて儲けることを考えていては将来はなく、共同配送に取り組むべきだと考える。

かつて当社が酒の運送を行っていたときは、問屋が空ビンの寄屋機能を担って、空ビンの回収システムができており、問屋からメーカーへの空ビンの回収手数料が 1 ケース 56 円であった。しかし、現在では一升ビンでも売り切りになってしまった。こうしたこともあって、市内の酒問屋の倉庫は今では減少し、扱っている商品アイテム数も 10,000 くらいから 6,000 ほどに減少している。基本的には小売店や消費者は我が儘で、プラス α のある方向を向いていき、問屋機能も商社が取っていくということで、酒問屋は本当に生き残りの方途を考えなければならない段階にきていると考えられる。

（共同配送で運送業に助手が必要となり雇用が生まれる）

当社は、大手メーカーの廃棄コンピュータの配送にも関わっているが、取引先相手を 1 社で売上げの 3 割を占める状況はリスクもあり厳しい。共同配送のようなアイデアを提案しても関西では不平、不満として取られてしまい、前向きに検討されないところがあり、そこは関東と大きな違いである。関西での物流の位置づけは、いわば窓際であるが、関東では金儲けの重要な位置にある。

共同配送システムでは、これまで各問屋が個別に、非効率に配送していた車が各問屋の荷物を混載する形でフルに稼働することになる。そうなると、現状では 2 トントラックに運転手一人で 1 日 2～3 サイクルが限度であったところが 5～6 サイクルの回転が可能となる。その場合、運転手 1 人では体が保たなくなり、助手が必要となる。今までのトラック輸送にはなかった「助手」という新たな雇用創出ができる。

(共同配送への問屋ニーズとシステムの構築)

共同配送センターを整備することにより、問屋は在庫を抱える必要がなくなり、自社倉庫は他用途への利活用が可能になるなど、問屋のニーズは高いと考えられる。さらに、近畿の酒問屋のみならず地方の酒造メーカーもこの共同配送センターを利用することで、わざわざ大阪に事務所を構える必要もない。

共同配送センターは、ヤードとコンピュータシステムとコンピュータを操作する人やピッキング・仕分けする人、リフト運転手等のマンパワーがあれば機能する。配送は運送会社が助手付きで対応することになる。

ヤードは高速道路の高架下が便利であり、ヤードの使用料はメーカーがケース単位で課金し、支払う形をとり、配送費は問屋が負担することになる。現在でもH酒造は西区に倉庫をもって対応しているとか、各酒造メーカーが持つ倉庫機能を共同配送センターが担う形にすると、自社で倉庫を持つ必要がなくなり、酒造メーカーに取ってもメリットになる。

共同配送センターで扱う荷には、酒類だけでなくあらゆる食品が付随してくる可能性がある。酒のつまみなどいわゆる「乾きモノ」は何時配送しても良いわけで、その分運送コストも安い、それらも共同配送システムに乗せることができると、薄利多売のシステムが構築できる可能性がある。

共同配送センターの組織は協同組合組織形態にしても良いし、雇用の創出という点からは3交代制で夜間にピッキング作業を行うとかすると、ワークシェアで多くの雇用創出ができる。

共同配送システムで酒問屋がそれまで抱える労働力は合理化されることになるが、そこを避けては酒問屋は生き残っていけない。運送業の側からは、宅配との競争になるわけで座して見ているわけにはいかないし、メーカー主導の運送費切り詰めに甘んじているわけにはいかない。

共同配送センターの立地場所としては西成地区は交通の利便性も高く、流通の「環」になれるところである。また、高速道路等の高架下の空地活用との観点から言えば、高速道路の高架下は利用価値がありそうだ。

野宿生活者の労働特性を踏まえた共同配送センターの事業枠組みの構想、メーカー側の物流・配送の現状を把握する必要がある。

■ C社…再生資源（リサイクル）業

●再生資源業界と雇用

再生資源業界の雇用は厳しい。かつて、野宿生活者を雇用し、古紙回収に従事してもらい、リヤカーの貸代 100 円、家賃 200 円を貰い、平野区加美の 3ヶ所に住まわせていた。しかし、古紙の値下がりですれも難しくなっていた。再生資源業界の従業者は、事業所付近に住む女性のパートが多く、時給 700～800 円程度である。

家電リサイクル法が施行されることになるが、まだ収集運搬費も決まっていない状況で営利目的ではとてもやれる状況ではなく、厳しい。指定引取場所は午後 5 時までの運営で持ち込みにも制約が生じ、管理伝票のない不法投棄が増える可能性がある。自治体によってはこれまで粗大ゴミ扱いしていた特定家電（テレビ・エアコン・冷蔵庫・洗濯機）を指定品から外す動きも出ている。こうしたことになれば、マンションのゴミステーションに捨てに来る人が出る可能性もあり、管理組合で監視を強める動きもある。

再生資源業界近代化協議会（以下「近代協」）では、回収した廃家電を輸出する取組も行っているが、排出者からお金が取れない状況にあるが、回収作業に野宿生活者が関わっていくと考えられる。

野宿生活者はすべてではないと思うが、時間に縛られず自由な生活をしたいとの考えで野宿生

活をしている人もある。天王寺で野宿生活をしながら鉄くずを回収していた 75～80 歳くらいの男性は、士官学校出のエリートであるが時間に拘束されることが厭で野宿生活をしているとの話を聞いたことがある。

現在、当社にはかつて野宿生活をしていた 80 歳の男性がいる。駒川の量販店で段ボール回収整理に就いてもらっているが、別に悪いことをするわけではなく市営住宅に住んで普通に生活している。

多くの野宿生活者も段ボール回収など自分でやれる仕事を行っているのだろうが、古紙市場の価格下落で、現在はアルミ缶回収に行っていると見られる。段ボール紙回収は、当社でも 2～3 年前まではやっていたが、リヤカー 1 台に積める段ボールの量は 300kg くらいで、一日に 2 回転して 3,000 円くらいの稼ぎになる。非常に重労働である。

●野宿生活者の就労機会づくり

(役所の古紙回収・分別で就労機会が生まれる)

日本の古紙がアメリカのものとは比べ高い市場価格で取り引きされる理由は、分別がなされ品質が良いからである。再生資源業界において野宿生活者の就労機会づくりの可能性は、ゴミの回収から分別の過程にマンパワーを投入し、焼却に回さず資源化を図ることである。分別されたゴミは、古紙や紙問屋に持ち込み再資源化が可能になる。

現在、大阪府や大阪市ではゴミの分別は一応なされている。役所内の自販機から出る空き缶は清掃委託業者（入札）によって回収され、缶回収業者に引き取られていると考えられるが、問題の一つは紙の回収状況である。

現在、大阪府は 4 トン/日の原紙を使用しているが、排出される古紙の量は 2 ヶ月で 10 トンである。1 ヶ月を 20 日としても 2 ヶ月では 160 トンの原紙を使用していることになる。排出される 10 トンを除く残り 150 トンは一体どこにいったかという点がある。

役所で使う紙量という点では、大阪府警が交通違反で使う赤切符、青切符があるが、半年間でこの赤切符、青切符の破棄量は 60 トンにもなる。廃棄に関わる業務は委託業務（入札）であり、廃棄にあたっては、廃棄状況を確認するために警察官が立ち会うことになっている。

現在、大阪府で出てくる古紙は殆どが新聞類である。もし、仮に大阪府で毎日使われる 4 トンの原紙が同量排出され、それらを回収・分別することができれば、かなりの資源の有効活用が可能となる。4 トンの古紙を分別資源化するには、コンベアー 2 基と 15 人の分別作業員および梱包作業員（問屋への搬送準備）で、一日の作業量となる。紙の選別は、3 段階をくぐらせることで可能である。コンベアーに乗せ手作業で分別していく。

大阪市でも同様のことが考えられる。現在の役所（庁舎）のゴミは、80%が紙で、残りが缶やペットボトルである。

(役所が率先して取り組めば、民間の大事業者等の範になる)

大阪府は ISO14001 の認証取得を行っているが、なおのこと徹底した分別回収の取組を強化すべきではないかと考える。役所の分別回収作業に野宿生活者のマンパワーを活用すれば、野宿生活者の就労機会が得られることになる。そして、そうした取組は、郵便局などの他の官庁や民間の大きな事業所（関西電力や大阪ガス etc.）の範になると思われる。

また、大阪府や大阪市がモデル的に実証することで、各市町村への取組に広がっていく可能性もある。現在、松原市では一日 60 トンくらいのゴミが出るが、市の清掃工場は半分の処理能力しかなく、残りは民間委託処理している状況である。また、分別収集した資源ゴミは夏場で 20 トンくらいあり、入札で処理業者に処理委託している。

東京の秋葉原では、ビルの中の上下で廃棄物の分別回収場所を確保し、分別して回収業者に出しているところもあり、ゴミ排出の量次第では別場所にわざわざ分別回収場所を作らなくて済むわけである。ただ、役所や民間にしる既存業者があり、それら業者の仕事を取るようになる。

●リサイクルに関わる動向等

パチンコ台のリサイクルについては、当社も3年前までは取り組んでいたが、運送業者6社の中で大手4社が組合をつくり、自分たちでモーターや基盤、液晶などの有用部品を取り出し、その後新日鐵に持ち込んでいる（新日鐵は高炉で粉碎・焼却利用）。

運送業者は、新しいパチンコ台を群馬や名古屋で積み込み、パチンコ台の入れ替えで古い台を引き取り搬送しているが、指定場所（新日鐵）までの過程で有用部品を取り出しているわけで、この流れは既に出来上がっており、新たな参入は難しいのではないかと。

携帯電話のリサイクルについては、バッテリー部分の再利用や金や銀の回収などがなされているのではないかとと思われるが、回収ルートを含めNTT（ドコモ）に確認してみる必要がある。

また、知り合いの業者の中に、携帯電話から副業的に金を回収している人がいる。液晶画面のパソコンやテレビが普及してきており、これからは液晶の回収処理が必要になると考えられる。

■D社…清掃業

●業界動向と雇用者

（清掃業務はパフォーマンス）

当社は、鉄道会社の100%子会社で、オフィスや商業施設等の清掃業務を行っている。また、車輛清掃も行っているが、夜間作業が多く、特殊な技能・知識を有するため、鉄道会社OB職員を中心にローテーションを組んで対応している。

最近の清掃業務は、若い人が増える傾向にある。それは、顧客（クライアント）がそうした要望を出して、清掃が一つのパフォーマンス、「見せる清掃」に変わってきているためである。

清掃業務といっても、当社は接客業務と考えており、パートやアルバイトに対しても社員と同等の教育を行っている。とくに、大阪駅では地方から出てくる人も多いため、清掃以外で案内や地図を尋ねられるケースも多く、それらにきちっとした対応ができなければ、クレームの原因になったりする。

現在、当社では、社員・パート・アルバイトで2,500人くらいの人働いている。パート・アルバイトが1,500人くらいで、その年齢構成は、半数以上が45歳以上である。4時間の時間契約というのもあるが、夜間だけ、日勤だけというのはほとんどない。基本的には、朝勤務に就いて、翌朝まで24時間の勤務であり、1ヶ月に12日くらい働くパターンが一般的であるが、各部署により異なる。

清掃業界も厳しい競争にさらされており、親会社—子会社の関係に甘えることなく、やり方を工夫し、効率化を図っていくことが求められる。従来の古いイメージの“清掃”ではなく、オーナー自身が“若い人”をイメージしており、それに対応した清掃を考えていかなければならない。

●野宿生活者の雇用と業務内容

野宿生活者を雇用することについては、身元がはっきりしていないだけに心配で、不安である。お金や金券を扱うケースもあり、更衣室も共同である。野宿生活者には、構内のゴミ箱のジュースをまき散らしたりして、迷惑を受けているケースもある。

駅の清掃業務には130人くらいが従事するが、基地駅から各駅の清掃にクルーを組んで1～3時間おきに巡回している。夜間の大がかりな清掃といえば、ワックスがけであるが、これは機械のオペレータなどがあり専門のスタッフがあたる。また、車輛関係の仕事も安全・保安面の問題があり、鉄道会社のOB職員（定年は60歳）が中心となって対応している。一般には、日勤帯・夜勤帯において単一の仕事だけをするということではなく、いろいろな仕事を複合してやる。

ゴミの回収は、清掃員が各駅のストックヤードに回収したゴミをストックし、処理業者に委託処理している。ゴミの分別は特に指示しておらず、若いチームの中には、分別しているところも

ある。大阪駅のストックヤードは規模も大きく、業者委託しているのは各駅と同様である。定期券やチケットは回収して、名刺等に再生利用を図ったりしている。

求人方法は、ハローワークを通じ募集・採用している。体力があること、接客対応がうまくやれること等が大事である。仕事がきついのか、辞めていく人も多いが、中には若い人で3～4年勤続の人もいる。チームを組んでの共同作業となるので、協調することも大事である。

■ E社…新聞販売業

●新聞販売店の現状と従業者

当連合会は、大阪市・大阪府下のE新聞販売店の連合組織で、共同の求人広告を出し、面接を行ったりしているが、雇用の最終判断は個別の販売店が行っている。現在、E新聞販売店は大阪市内に150店、府下270店あるが、それぞれが販売エリアをもち、所長（会社組織から個人事業レベルまで）がいて、独立採算で経営している。1店当たりの販売部数は1,500～2,500部程度である。

販売店は、所長の他、専業・パート・アルバイトで構成され、専業は配達・集金・拡販（営業）を行い、パート・アルバイトは、配達専門だったり、集金や拡販だけなどさまざまである。かつては、「新聞少年」といわれ15～16歳少年が多かったりしたが、最近は夕刊だけ配達する女性、不況の関係で朝の配達をするサラリーマンが増えるなど様変わりしている。

地域差もあるが、バイクで250～260部を2時間半くらいで配達するのが普通である。自転車であれば、チラシでかなりの重量になり、1度に50部くらいが限度で、部数をこなそうと思えば取りに帰らなければならなくなる。朝は、チラシ折込みに1時間、250～260部の配達に2時間、夕刊の配達に2時間、が標準的であろう。

大学生や専門学校生・予備校生に対する奨学金制度もあり、住込みで給与が177,000円、家賃は所長持ちで、朝夕の食費は28,000円が給与より天引きされる。現在、奨学生は約450人であるが、他社とも似たようなものである。

専業従事者は基本的に配達・集金・拡販のすべての業務をこなし、21～23万円／月に歩合が加算される。責任の度合いで店長や区域責任者への昇格もある。朝早く、交通機関がないため、住込みが一般的である。

●野宿生活者の雇用

野宿生活者の雇用については、現金を扱う関係で身元保証がしっかりしていることが必要であり、身元保証のない人は難しい。これまでも集金したお金を何十万円と持ち逃げされるというような事故が起きている。それと、決まった時間内に配達しなければならず、時間に厳格、規則正しい生活態度が求められる。そうしたことが野宿生活者にできるかも問題になる。

配達だけのパートとか、時給計算の場合もあるが、概ね、朝刊の配達で280～300円／部・月、夕刊で200円／部・月、100部の配達に1時間かかるとして、朝刊で3万円／月、夕刊で2万円／月となる。新聞配達の場合は、1ヶ月サイクルの雇用となる。

新聞配達の場合、天候が悪いとつらい仕事だし、休みが月に1回、何よりも時間に拘束される。時間については“マッタ”が効かず、顧客のクレームの原因になる。

従業員は、概ね男性で若い人から中高年（45歳くらい）までを募集の対象と考えている。集金は女性のパートの人が多いが、50件／日、200件くらい（約100万円）を担当するケースが多い。

手当は集金額の一定比率である。読者管理は1週間～10日間くらいで覚える。新聞配達員にとって、時間、金銭、服装（身ざれいであること）が重要である。

バブルの頃は、新聞配達員のなり手がなく、その理由は、月に一度しか休みがなく、時間に拘束される（毎日が中途半端）ためと思われる。新聞配達員に外国人はいないか、いても少ない。

それは、文字とか会話の障害があるためであろう。野宿生活者の雇用については、何らかの助成があったとしても、本人に仕事の性質が合わないのではないかと思われる。

■ I 社…警備業

●業界の現状と動向

(公安委員会の監督を受ける)

大阪府下には約 1,260 社の警備会社があり、546 社が警備業協会に加盟している。会社の規模は、セコムのような業界大手から従業員 10 人規模の会社まで、さまざまである。7～8 割は中小警備会社であり、4 万 1 千人の警備員のうち 2～3 割はパートである。

警備業は、法により①施設警備（工事現場やイベントの警備を行う）、②交通警備、③運搬警備（現金輸送・美術品輸送等）、④身辺警備（SP 等）に区分され、これらの中で交通警備の要員が 25,000～26,000 人で最も多い。例えば、阪神高速道路工事に伴う警備要員には、50 人規模が必要になり、期間要員でもあり臨時に雇用して対応することになる。しかし、警備要員には研修が義務づけられており、過去に警備経験があったとしても、従事前の再教育が必要であり、それは雇用主の責任となる。

警備業法では、公安委員会が監督することになっており、立ち入り調査も随時行われ、資格要件が調べられ、違反等があれば場合によっては営業停止もあり得るため、業者も神経質になる。

●求人および野宿生活者の雇用等

(ハローワークや求人誌による募集)

求人募集は、ハローワークや求人誌を通じて行われるが、先般行われた協会会員会社による面接には、200 余人が集まった。こうした合同面接会は、ハローワークと連携して年 4 回開催され、シルバー人材センターでも警備員になりたい人に対して、プログラムを組んで研修を行っているが、日当なし、交通費は自己負担である。

求人に対する応募の状況等をハローワークの担当者から聞いたところでは、高齢者が多く、若い人は辞めていく人が多いとのことであった。警備会社にとっては、若い人に辞められたら困るし、高齢者では体力や健康に不安がある。継続雇用の場合も、小遣い稼ぎ的な考えではないかと思われ、現場が変わると厭がって辞める人がいる。

(野宿生活者の雇用等)

野宿生活者が警備業に就くには、住所・身元がはっきりしていること、健康診断で問題がないこと等が必要であり、(野宿生活者の状況を)普通に考えると難しいように思われる。

交通・工事現場の警備は、トイレや休憩場所など安全衛生管理上の環境整備が義務づけられるが、十分ではなく、仕事がきついことと、賃金も最低賃金レベルで仕事の割に安い。その背景には、不況で警備費が低く抑えられているという状況があるとみられる。

警備員についての新任警備研修および現任警備員教育は義務づけられたもので、違反すると処分の対象となる。社員のみならず、パート・アルバイトでも同様である。また、A社からB社に移っても、新たに研究・教育を受けなければならない。

御堂筋パレードなどイベント等の警備については、大量の警備要員が必要になる。こうした場合は、協会がイベント主催者と打ち合わせをし、会員企業に対して人数の割り当てを含む調整を行っている。

警備員は全国で 40 万人いるといわれ、警察官が 20 万人であるから、警察の補助的な業務を行う警備員にも警察官に近い基本的な知識・素養（憲法や刑法等）が求められると同時に、基本動作の習得が必要である。

警備員の資格としては、例えば交通誘導については、一定の実務経験を経て二級、一級の資格

取得が可能であり、資格者は研修について免除されるが、基本教育は必要である。

雇用開発協会が雇用助成金について説明会等を開くと、問い合わせがあったりして、法律がインセンティブになっていることは確かである。しかし、野宿生活者の雇用について法的な対応がとられて、雇用主の方に何らかのインセンティブがあったとしても、「野宿生活者」ということが気になり、雇用は難しいのではないか。

夜間警備についてどのような対応をしているか、個別の会社で異なる。また、施設警備は 24 時間対応で、朝勤務に就き翌朝まで勤務し、そして休暇といったローテーションが一般的である。